

「徐霞客遊記」目次

卷一上

遊天台山日記

遊雁宕山日記

遊白嶽山日記

遊黃山日記

遊武彝山日記

遊廬山日記

遊黃山日記後

遊九鯉湖日記

卷一下

遊嵩山日記

遊太華山日記

遊太和山日記

閩遊日記前

閩遊日記後

遊天台山日記後

遊雁宕山日記後

遊五台山日記

遊恒山日記

卷二上

浙遊日記

江右遊日記

卷二下

楚遊日記

卷三上

粵西遊日記一

卷三下

粵西遊日記二

卷四上

粵西遊日記三

粵西遊日記四

卷四下

黔游日記一

黔游日記二

卷五上

滇遊日記一（缺）

游太華山記

游顏洞記

滇遊日記二

卷五下

滇遊日記三

卷六上

滇遊日記四

三

八

一六

卷六下

滇遊日記五

卷七上

滇遊日記六

卷七下

滇遊日記七

卷八上

滇遊日記八

卷八下

滇遊日記九

卷九上

滇遊日記十

卷九下

滇遊日記十一

卷十上

滇遊日記十二

滇遊日記十三

盤江考

溯江紀源

卷十下

滇中花木記

隨筆二則

永昌志略

近騰諸彝說略

麗江紀略

法王緣起

山中逸趣跋

徐霞客遊記卷一上

遊天台山日記「浙江台州府」

癸丑の年 万曆四一（一六一三）年

「浙江台州府寧海県域」

《1》寧海から天台山へ

〔三月三十日〕

寧海県を西門から出発する。雲もなく晴れ渡り太陽が輝き、人の心情も山の姿も、喜んでいられるかの如くである。三十里進むと梁隍山に至った。聞くところによれば、この地では虎が跋扈しており、月ごとに数十人に被害を与えているという。そこでここに宿泊することとする。

◆梁隍山に泊。

〔四月一日〕

朝は雨。十五里進むと分かれ道がある。馬首を西に向け天台山へ向かう。空が次第に晴れてくる。

また十里進むと、松門嶺に至る。山道は険峻で路面は滑りやすい。そこで馬から下りて歩くことにする。奉化よりこのかた、幾重もの山道を越えてきたが、どれも山麓をめぐるものであった。それがこの地に至って、迂回したり、谷川に臨んだり高い所に登ったりすることになってきた。すべて山の尾根である。雨が上がったばかりで晴れ渡り、美しい山の景色の中に溪流の音が聞こえ、繰り返す新しい景勝が出現する。緑の草むらの中に杜鵑花が赤く映えており、山を登る苦しさを

忘れさせてくれる光景である。

また十五里進む、筋竹庵で昼食とする。山頂ではあちこちで麦を植えている。筋竹嶺より南に行けば、国清寺へ向かう大路である。たまたま国清寺の僧侶で雲峯というものと食事をもにすることになる。彼が言うには「ここから石梁に至るには、山道は険しく、且つ長い。荷物を携帯していくのは大変であり、軽装で行き、重い荷物は（人に運ばせて）国清寺で待たせているのがよい」と。私はその意見に同意し、担夫に雲峯とともに国清寺に行かせ、自分は蓮舟上人とともに石梁への道をたどることとする。

「浙江台州府天台県域」

五里進むと筋竹嶺を過ぎる。嶺の旁らには背の低い松の木が多い。年を経た幹は屈曲し、根の辺りは葉が青々と茂っている。まるで下界の我が家にある盆栽のようだ。

また三十里進むと弥陀庵に至る。上下ともに高峻な山嶺であり、奥深い山で荒涼としている〔自注1〕。溪流の音が鳴り響き、強風が大を揺るがしており、山道を行く人は他にはいない。弥陀庵は重なる山々の中の平地にある。これからの道は厳しくかつ長い。またちようど道程の半ばにあたる。ここで食事にして宿をとるのがよい。

◆弥陀庵に泊。

〔四月二日〕

《1》天台山へ（続き）

朝食を終えると、雨がやむ。そこで道を蔽う水たまりを越え、山嶺をよじ登る。溪流と岩石とが次第に薄暗くなっていく。

二十里進む、夕暮れに天封寺に至る。寝床で、明朝の山頂への登攀

のことを思いやり、縁があつて、晴れの天気にならないかと考える。というのも連日夜になつてようやく晴れており、朝から晴れることはついぞなかったからだ。午前四時頃、夢うつつの中で、満天に星が出ているとの話し声を聞く。うれしくなつて眠れなくなる。

◆天封寺に泊。

〔四月三日〕

《2》天台山華頂峯

早朝に起きる。果たして太陽が燦々と輝いている。そこで華頂峰の頂に登ることに決める。

数里登ると華頂庵に至る。更に三里行くと、山頂近くに太白堂がある。どちらも鑑賞に足るものは何もない。しかし次の話を聞く、「太白堂の左の下に黄経洞という洞窟がある」と。そこで小道を下つてみる。

二里行くと、下にひとつの大きな岩が突出しているのが見える。とても美しいと感じた。ところがそこへ至ると、一人の有髪の僧侶が洞窟の前に庵を結んでおり、洞窟から風が吹いてくるのを避けるために、石ころで洞窟の門を塞いでいる。誠に残念に思った。

再び登ることにし、太白堂を経て、山道に順つて華頂峰の山頂に登る。山頂は荒れた草地で風に吹かれて草がなびいている。山の標高が高く風は寒冷で、草の上には霜が一寸ばかりもおりている。周囲を見下ろすと山々が四周に展開しており、宝玉のように美しい花々や木々が、細やかに目の限りに広がっている。山麓では花が盛んに咲いているのに、山頂では花が開いていない。山が高く寒冷なためであろう。元の道をたどつて華頂庵に下る。池の畔の小さな橋を過ぎて、さら

に嶺を三つ越える。谷川がめぐり山々が重なり、木々が生い茂り岩石が美しく輝いている。一箇所をめぐるたびに新しい奇景が展開し、まったく望むところを満足させる。

《3》方広寺

二十里行き、上方広寺を経由して石梁飛瀑に至る。曇花亭で仏を礼拝する。子細に飛瀑を鑑賞する暇も無く、下つて下方広寺に至り、そこから石梁飛瀑を仰ぎ見る。たちまち天の果てにいるかのようである。

「断橋と珠簾が最も優れた景勝だ。」と聞く。僧侶が「昼食後でも往復できる。」と言う。そこで仙筏橋から山の後に向かい、嶺を一つ越える。

《4》断橋

溪流に沿つて八九里行くと、滝が石の門のようなところから流れ落ち、ぐるぐるとめぐつて三段をなしている。一番上の段が断橋である。二つの石が斜めにもたれかかっている。滝の水がその石の間に砕け散つてほとぼしり、またひとつに合わさつて淵に入る。真ん中の段は二つの石が門のように対峙している。滝の水は門のために束ねられ、勢いが甚だ激しい。最下段は淵の口がとても広い。水が注いでいるところは門の敷居のようで、水が窪みから斜めに下っている。三段の滝はいずれも高さが数丈あり、それぞれが神奇を尽くしている。しかし流れは段々に下つており、湾曲したところは滝に遮られており、全部を一度に目に収めることはできない。

《5》珠簾水

また一里ばかりで珠簾水がある。水が流れて下るところは平らで広々としており、水勢はゆったりとしていて、蕩々と水音を立てて流れている。私は足をむき出しにして草むらを跳ね、木につかまって崖を

登った。しかし蓮舟君はついてこれなかった。夜のとばりがあたりに立ちこめてきて、ようやく還る。

仙筏橋に足を留め、石梁が虹のように掛かり、飛瀑が雪のような飛沫を吹き上げているのを眺める。まったく睡るのが惜しいくらいだ。

◆方広寺に泊。

〔四月四日〕

《6》石梁飛瀑

天空も山々も黛のごとく青緑に輝いている。朝食をとる時間も惜しんで、すぐさま仙筏橋に沿って曇花亭に登る。石梁飛瀑は曇花亭の外になる。梁は広さが一尺あまり、長さが三丈あまりで、兩岸のくぼみの所に架かっている。二筋の滝が亭の左から流れてきて、橋（石梁）に至って合流し、下へ流れ落ちている。雷や河が決壊するかのような轟音が鳴り響いている。滝の高さは百丈を下らない。

私は石梁の上を歩いてみて、深い淵を見下ろしたところ、ぞつとして鳥肌が立つほど慄然たる思いであった。石梁を渡り終えたと向こう側に大きな石が聳えていて、向かいの岸に登ることはできない。そこで引き返した。

曇花亭を通り過ぎ、上方広寺に入る。寺の前を流れる溪流をさかのぼれば、さきほど隔壁となっていた大きな石の上に出る。そこに座って石梁を眺める。下方広寺の僧侶が食事を促すために声をかけてくれるまで、ずつと眺めていた。

《7》万年寺

昼食後、十五里進んで万年寺に至る。蔵経閣に登る。閣は二屋で、南北経の両方を蔵している。寺の前後には杉の古木が多くあり、三抱

えほどの太さがある。鶴が巢を懸けており、美しく清らかな鳴き声を聞かせている。これもまた深山における雅やかな響きである。

この日私は、桐柏宮に向かい、さらに瓊台や双闕といった景勝を尋ねたいと思っていた。しかし、分かれ道が多く、迷いそうになったため、そのまま国清寺に向かうこととした。国清寺は万年寺から四十里ほどで、中程で龍王堂というところを通過する。嶺を一つ下るたびに、私はもう平地に着いたのかと思つたが、その下に更に幾重もの嶺があつて、下りの勢いは中々やまない。そこでつくづく実感した、華頂峰の高さと言え、天からさほど遠くないのだ、と。

《8》国清寺

日が暮れて国清寺に到着した。雲峰和尚と再会したが、あたかも久方ぶりに会うかのような気がした。これからの奇勝の探訪について相談する。雲峰和尚が言うには「天台山の名勝では、寒岩と明岩に及ぶものはない。遠いところにあるが、馬に乗っていけばいい。先ず寒岩・明岩を見て、後に歩いて桃源に至り、そこから桐柏宮に至るルートを取れば、碧壁や赤城も一望にすることができると。」

◆国清寺に泊。

〔四月五日〕

《9》寒巖・明巖へ

雨模様であるが、気にせずに出かける。寒巖・明巖に至る道をたどる。国清寺の西門で乗る馬を求め、馬がやってきたが、同時に雨も降り出す。

五十里進み歩頭に至ると雨がやむ。馬も返す。

二里進み、山に入る。周囲をめぐる峯々が溪流に映えており、樹木

が生い茂り奇岩が重なっている。とても心地よい。東陽県から一筋の溪流が流れてきているが、水勢がはなはだ急で、川幅（流量）は曹娥江に匹敵するほどである。辺りを見渡したが渡してくれる筏もなく、従僕に背負われて渡る。深さは膝ほどである。渡りきるのにほとんど一時を要する。

《10》明巖

三里進むと、明巖に至る。明巖は寒山と拾得が隠棲したところで、二つの山が曲がっている。《大明一統志》にいう「八寸関」である。関に入ると、四周に崖が城壁のように切り立っている。最も奥に、数百人が入れるほどの深さ數十丈もの洞窟がある。洞窟の外の中には、二つの巖があり、どちらも石の壁の半ばにめりこんでいる。洞窟の右には石筍が突き立つように聳えている。その先端は石壁と同じ高さにまでなり、一筋の線ほどしか離れていない。石筍の上には青い松や紫の花が盛んに茂っており、左側の両巖と相對しているかのごとくである。誠に奇勝であるといえよう。

八寸関を出て、再び岩山を上ると、左にまがる。初め来た時に、下から仰ぎ見たときは、わずかな隙間程度しか見えないように見えたが、実際に登ってみると、数百人もの人数を収容できる広さがあることに気づく。巖の中に井戸がひとつある。仙人井という。浅いが見つかることはない。明巖の外にまた大きな岩塊がある。高さは数十丈、高く聳える様が（上の部分が二つに割れていることから）二人の人間が立っているかのようなのである。僧侶たちは、指さして「寒山と拾得だ」という。寺（寒巖寺）に入る。夕食後雲が晴れ、新月が天に昇る。めぐらせた崖の頂上にあつて、月に向かえば、美しい光が岩壁にあふれている。

◆寒巖寺に泊

「四月六日」

《11》寒巖

早朝に寺を出発する。

六七里進むと寒巖に至る。石が壁のように垂直に切り立っている様は、あたかも刀で切り取ったかのようなものである。振り仰いで高い所を見ると、洞窟がとても多い。巖の半ばに一つ洞窟があり、広さは三十歩、深さは百歩余りもあり、洞内も平らで広々として明るい。巖に沿って右に進み、岩の狭い小径を上に登る。巖の低くなった窪地に二つの石が向かい合つて聳えている。下の部分は分かれているのに、上の方でつながっている。これがあの「鵲橋」である。この滝は、あの方広寺附近の石梁飛瀑と奇を争う名勝であるが、ただ、瀑布がまつすぐ落ちていた点が、やや魅力を欠く。

引き返し、僧侶の宿舎で昼食をとる。

《12》桃源へ

のち筏を求めて溪流を下ることとし、谷川に沿って山の下を進む。この一帯は、切り立った壁のような険しい崖が続いており、草木がその上にはびこつて垂れている。海棠樹や紫荊藤が多く、その翠が溪流に美しく映り、香しい風が吹き寄せるところでは、玉蘭花や香草がどこにでも広がって、絶えることがない。

一つの山の突端に至ると、石の壁が溪流の底から直立している。川は深く流れは速く、しかも川岸に通れる余地はほとんどない。岩壁の上に穴をあけ、そこを行くのだが、穴は僅かに足の半分しかない。岩壁に張り付くようにして通るのだが、魂魄を多に恐ろしがらせるものである。

寒巖より十五里進むと、歩頭に至る。(往路とは異なり) 小道を通って桃源へ向かう。桃源は護国寺のそばにある(はずである。しかし)。護国寺の廟宇は既に廃棄されており、土地の人でも知る人はいない。雲峰和尚に従って草ぼうぼうの曲がりくねった道を推し進むが、太陽は沈み、宿とするところもない。かくしてまたも道を尋ね、ようやく坪頭潭というところに至る。潭は歩頭より僅かに二十里なのだが、今回は小道を通ったがため、迂回することになって三十里あまりの道のリだった。ここで宿す。桃源は訪れようとする人を惑わすというのは、本当のことだった。

◆坪頭鎮に泊。

「四月七日」

《13》瓊台へ

坪頭潭を出発し、曲がりくねった山路を行くこと三十里余り、溪流を渡って山に入る。

さらにまた四五里進むと、山の口が次第に狭くなっていく。「桃花塢」という館がある。深い淵に沿って進む。淵の水は澄み切っていて青々としており、滝の水が上から注ぎ込んでいる。鳴玉澗という場所である。澗の水は山沿いに流れて行き、人はその澗に沿って進む。澗の兩岸の山は全てむき出しの岩石で、重なる山並みは随所に緑の木々を擁している。目に見えるものは全て觀賞に堪えるものであり、そのすばらしさは、おおよそ寒巖・明巖に匹敵するほどである。澗が行き詰まると道もなくなる。一条の滝が山のくぼみから流れ落ちており、水勢は縦横無尽である。

昼食後、館を出発し、山の窪地に沿って東南へ進み、二座の山嶺を

越える。有名な「瓊臺」「雙闕」を尋ねようとするが、どこにあるのか知る人がいない。

《14》瓊台

さらに数里進む(人に尋ねたところ)、その山頂にあることが分かる。雲峯とともに山道をよじ登り、ようやくその山頂に到達する。下を俯瞰すれば切り立った崖が四面を囲んでおり、まったく桃源郷のような風景である。しかし緑なす岩壁が万丈も続く様は桃源郷を上回っている。山峰の頂上部分が真ん中から裂けて分かれているところがあつた。これが双闕である。双闕に向かい合ってぐるっと囲まれているものがある、これが瓊台である。台は三面が絶壁で、その一方はそのまゝ双闕につながっている。私は双闕に相対する位置におり、日が暮れてきたのでそこに登ることはできない。しかしこの辺りの景勝については既に一日満喫した。そこで山を下り、赤城山の後を通って国清寺にもどる。だいたい三十里の道のりである。

◆国清寺に泊。

「四月八日」

《15》赤城山

国清寺を離れ、山の裏側の道を五里進んで赤城山に登る。赤城山の山頂は円形の岩盤が空に聳えており、城郭のように見え、岩石の色は微かに赤い。岩穴があるが、僧侶どもがでたらめに居を構えており、天然の景勝を台無しにしている。有名な玉京洞・金銭池・洗腸井も、これとって見るべきものではない。

徐霞客遊記卷一下

遊嵩山日記 「河南河南府登封縣」

癸丑の年 天啓三（一六二三）年

〔序〕

私は、幼い頃から五岳に対する志を抱いていた。しかし玄岳太和山（武当山）は五岳の上にあるものであり、それへの思慕の念は五岳よりも高いものがあった。ずいぶん前から、先ず先駆けとして湖北省の襄陽府と鄖陽府との間にある太和山を訪ねて、更に北上して陝西の華山に登り、次いで劍閣にある連なる雲棧を通って、四川の峨眉山へ行く、という大旅行を心に描いていた。しかし母親が年老いてきたため、志を変更して遠距離の遊行は避け、太和山までの旅行を先ず行い、親への孝行を優先させることとした。ただ、長江や漢水などの流れを遡及するのでは日数がかかりすぎるので、陸行して進み、帰路を船で下ってくる方が時間が短くてすむのでよいと考えた。また、南側の襄陽から鄧州・汝州を通って嵩山に至る陸路の道のりは、北側の開封から嵩山を経て陝州に至るものとはほぼ同じくらいである。加えて、開封經由の陸路を取れば、嵩山・華山のどちらをも訪問した上で、最後に太和山にご挨拶できる。かくして嵩山から始める陸路を取ることと決し、天啓三年二月一日を以て旅を始めた。

〔二月十九日〕

〔河南開封府滎陽県域〕

《1》黄宗店から密県へ

十九日かかって、河南省鄭州の黄宗店に至った。まちの右から石畳の坂を上り、聖僧池を鑑賞する。清らかな水を湛えた池が、緑なす山の半ばに留まっている。山から見下ろせば、深い谷川が縦横に伸びて重なりあっているが、一滴の水もない涸れ谷である。斜面を下って涸れ谷の底を進み、香爐山に沿って、曲がりながら南へ向かう。香爐山の形は、三つの峯が聳える様が鼎を逆さまに伏せたかのように、たくさん山の山々がこれを取り囲んでおり、その美しい様は見る人をして喜ばせるものがある。谷底は、乱立する石でいっぱい、紫の玉の如き姿を現している。両側は石の壁がうねうねと続いているが、その膚はやや精密で湿潤な感じがする。ここを清流があふれ流れていたときのことを想起してみると、泡立つ水しぶきが珠玉のように輝き、黛のように青々とした淵が満々と水を湛えていたのであろう。どのようなすばらしい景色だったのだろう。

十里進み、石仏嶺を登り越える。

〔河南開封府密県域〕

さらにまた五里で、密県の県域に入る。遙か嵩山を望むに、まだ六十里以上もある。分かれ道から東南に二十五里進み、密県城を通り過ぎて、天仙院に至る。

《2》天仙院

この院には天仙を祀っている。天仙とは黄帝の三女である。白い松が、祠の後ろの中庭に立っている。言い伝えによれば、天仙がここで肉体を脱して昇仙したとのことである。松は大人で四抱えほどもあり、根本はひとつながりの幹に分かれ、それぞれが空に向かって雲に入らなばかりに伸びている。樹皮はなめらかでまるで脂肪を凝らした

如く、白粉で装ったような美しさがある。枝は龍のように曲がって蟠り、馬のたてがみのような緑の葉は風に舞い、頭をあげ、胸を張るように、天空へ向かってすつくと美しく立っている。誠にすばらしい景観である。松を石の欄干が取り巻いている。北に一棟の長廊が延びており、そこには詩や聯を記したものがたくさん並んでいる。しばらくそこを参観したのち、下の方へ下り、滴水を見る。溪流はここで急に下へ落ち込んでおり、崖がその上を覆い、水が落下する音が聞こえる。

《3》密県から登封県域へ

密県域に引き返し、さらに西門に至る。

〔河南河南府登封県域〕

そこから三十五里進み、登封県の県域に入る。ここは耿店という。ここから南へ向かうのが石淙への道である。今日はここに泊まることとする。

◆耿店に泊。

〔二十日〕

《4》景勝地石淙

小道に沿って南へ進む。二十五里の間、丘や不規則な高地が続く。しばらくして、小川に行き当たる。これを渡り、更に南に、丘の尾根を進む。そこから下を俯瞰すれば、石淙が見渡せた。

私は開封の方からやって来たので、この間の土地は平らで広々としており、古来より「陸海」と称されるのもよくわかった。平地の上には、河川があまりなく、あったとしても岩石があるものではなかった。それが嵩山に近づいて来て初めて、うねうねと起伏のある山々を見る

ことになった。かくして北流するものには景溪や須溪などの諸溪があり、南流するものに潁水がある。ただしこれらの諸河川は、いずれも土や砂利などの堆積物の間をうねうねと巡りながら流れている（のであまり見えない）。その中で、登封県の東南三十里のこの石淙は、嵩山の東の谷からの流れが、下って潁水に合流しようというあたりである。ここまで道筋は高低があり、くねくねと曲がっていたが、河川はどこでも陸地面から下位にあった。それがここに至って、流れが湧き上がるような岩々にぶちあたることになっている。それらの巨石群は、高い岸边と深い谷の間に聳え立ち、一夫が関所や枢要の地を守っているかのような赴きである。川の水は、それらの巨石の根元あたりに至って沸き立っており、ここから水と石とが融和した世界が始まり、その美しさは様々な変化を見せている。

川の水を巡る兩岸の崖は、あるいはカササギが屹立するかのよう、また雁が並び飛んでいるかのよう。水中にわだかまる巨石は、あるいは水を飲む水牛のよう、また伏せる虎のよう。低く小さいものは小島をなし、高く大きいものは平らな台をなす。石が大きくなれば、それだけ水面から高く遠ざかる。更にまた、その岩の中空には穴が穿たれ、石窟や石洞をなしているものもある。石と崖との距離を測ってみれば、わずか八尺ほどしかないが、蛇行する川の両端の最高距離を測れば、数十尺もある。

水が渓谷の中を流れ、石がその上に屹立している。石の姿は露出した骨のようであり、それに注ぐ水の流れは、骨を覆う皮膚のようであり、水と石とが調和した美しい景観を窮め尽くしている。全く予想もしなかったことだ、茅や葦の茂る水辺にあつて、一瞬で眼の塵埃を洗い流すような、すばらしい光景に出会えるとは。

《5》告成鎮から中岳廟・盧巖寺へ

高い丘に登り、西に十里行くと告成鎮である。ここは昔の告成県の場所である。測景台がまちの北にある。

西北に二十五里行くと、中岳廟である。廟に東華門から入ったとき、既に太陽は沈もうとしていた。しかし、私は盧巖寺へ行くことを渴望していたので、すぐさま廟の東北へ山沿いの道を登っていった。幾重ものアップダウンがある山路を十里ばかり行き、転じて山に入ると盧巖寺に行き着いた。

盧巖寺を数歩出ると、ごうごうと音を響かせながら、せばまった石の間を落ちる瀧があった。兩岸の峡谷の様は、水蒸気が充満していて、霞に被われているかのよう。瀧の流れを遡って寺の後ろ側へ行く。そこは谷底から崖がそそり立っていて、前面を半円形に取り巻き、上から覆い被さるようなしかかって、下の方は削られて引っ込んでいるかの如くである。流れ落ちる瀧の水は、空を飛んで落ちてきて、美しい彩絹が舞い、たなびいているかのようであり、細かな飛沫が谷中に充満している。その様は、武夷山の水簾洞にも劣らないものがある。ここでは水を得ることで奇勝をなしている。そして水はさらに岩石を得ることでよくなり、岩石も水のよさを助けている。水のよさを妨げることなく、さらに水を飛ばしているわけで、つまり武夷山よりも優れていると言えるのではないか。瀑布の下を徘徊していると、盧巖寺の梵音和尚が、お茶と点心でもてなしてくれた。(その後)急いで中岳廟に戻ったが、既に夜も更けていた。

◆中岳廟に泊。

〔二十一日〕

《6》太室山概説

早朝に、中岳廟に参る。

大殿を出て、東から太室山の頂上へ向かう。思うに、嵩山は「天地之中」と称されるところにあたっていて、祭りの等級としては五岳のトップである、だから「嵩高」と称される。少室山と対峙しており、山下には洞窟が多くある。そこで「太室」とも呼ばれている。この両室山が向かい合っている様は、まるで一對の眉のようであるが、少室山がでこぼこ高低があるのに対し、太室山は雄々しくすつくと聳えていて、自らの高い位を誇っているようであり、その厳めしきは屏風を背負って諸侯を謁見する帝王の趣がある。緑がかかった山脚より上は、連綿と崖が途切れることなく横たわり、並んだ屏風や伸展された旗のようである。そこでことさらに厳めしさを感じ取るのだろう。嵩山が尊崇され封建されるのは上古よりであり、漢の武帝は「万歳」の声が起こったという奇瑞により、新たに祭祀都市を建設した。宋の時代は、首都の開封に近かったこともあって重視され、祭祀の典礼が完備された。今でも、嵩山の頂上には、鉄梁橋・避暑寨の名が伝わっている。これにより、最盛期の様が想起されるであろう。

《7》太室山に登る―黄蓋峯・天門峯・登高巖・白鶴觀跡・頂上真武廟

太室山の東南に延びる支脈があり、その端を黄蓋峯という。その峯の麓が中岳廟になる。廟は規模が広々として壯観である。庭中には石碑が多く立っているが、いずれも宋・遼以来のものである。

太室山に登る本道は、万歳峯の下にあつて、太室山の真南に当たる。私は昨日、盧巖寺に行ったとき、先ず黄蓋峯(の側)を通り過ぎたが、その道中で秀でた峯を見た。それは中程から門のように裂けており、ある人が「金峯玉女溝」だといい、ここからも頂上に登る路があると

教えてくれた。そこで樵夫を備い、ガイドとして案内してもらおうよう
手配をしておいた。そして今、その道から登るのである。峯の秀でて
いるところに近づいていくと、道が次第に切れ切れとなってきた。そ
こを避けようとするが、険しく切り立っていてそのまま越えることは
できない。そこで北へ向かい土の山に取り付いてみれば、やっと登る
手がかりを得られるほどの小道があった。二十里ばかりも進んで、よ
うやく黄蓋峯を越えた。そこは先に見た金峯玉女溝の上に出ていた。
西へと狭い尾根道を越え、絶頂を目指して進む。

この日は濃い雲が墨を散らし塗ったようであったが、私は山行をや
めなかった。それがこのころになって山中の霧が少し沈静し、やや開
けると眼下に彩絹を連ねたり、玉を削ったような、重なる絶壁が見え
たが、また霧が合わさると大海の中を行くのと同じような状態になっ
た。

五里で天門峯に至った。その上の方も下の方も、重なる石の崖が続
いており、路には多く雪が積もっている。ガイドが最も険峻なところ
を指さして、大鉄梁橋だと教えてくれる。そこから折れて西に三里行
き、峯を廻って南に下ると登高巖である。いったい幽深さを帯びた岩
はすつきりとしていないものが多いし、すつきりとした岩は曲がった
り、ぼんやりとしていたり、それぞれが映え合うという趣を持ったも
のは少ない。しかしこの岩は、上は重なる崖によりかかり、下は絶壁
に臨んでいる。また開いた洞窟の門は重なる山々が守っており、左右
には台や屏風のような峯々が取り巻いている。

岩のあたりに入ると、深く大きな洞窟がある。洞窟は斜めに口を開
いている。数歩入ってみると、崖が突然途切れて五尺ばかりの穴が出
現した。足を置く間もないほどである。ガイドは古老の樵夫であるが、

その身の軽さは猿のようで、体を傾けて躍り上がって対岸に飛びつき、
そこにあった二本の木の枝を取って、臨時の橋としてくれる。そこを
渡ると、ドームのような岩が上からのしかかってくる。その中に乳泉
・丹竈・石榻などの名勝があった。

登高巖の側らからよじ登ると、またひとつの平台があった。谷の中
に突き出していて、三面が空に懸かっているかのような絶壁である。
ガイドが言うには「ここから下へは登封県城が見え、遠くは箕山や穎
水が見える」と。しかしこの時は濃霧があたり立ちこめ、全く何も
見えなかった。巖を離れ、転じて北に二里で白鶴観の址に出た。そこ
は山の窪地にあつて、険峻なところからは離れていて、平らな場所
であり、一本の松がすくと立っていて、ひろびろとした清らかな趣が
あつた。

また北に三里登り、やっと頂上を極めた。三棟からなる真武廟があ
つた。側らに井戸があつた。水は甚だ清らかで透明である。御井と言
う。宋の真宗が避暑で訪れた際、掘らせたものだという。

《8》太室山を降る

真武廟で昼食を取った。下山の道筋を問うと、ガイドが言うには「本
道は万歳峯から麓に至るもので、二十里である。もし西の谷を滑り降
りれば、路程は半分にできる。けれども路は険峻を極めている」と。
私はうれしくなった。というのは、「嵩山に奇勝が少ないのは、険峻
の地が少ないから」と思っていたからだ。（だから険峻の地を得られ
れば奇勝もまた得られると考えた。）そこで速やかにその道を選び、
杖をつきながら進むこととした。始めはまだ岩に取り付き、石を踏み、
密集した藪を開きながら下る程度であった。まもなく両側から石が迫
っている間を真っ直ぐ下り始め、振り返って仰ぎ見れば、両側の崖壁

が天を被い塞がつかという様である。これまでは、峯の頂上では霧の滴が雨のように垂れ込めていた。それがここに至って次第に開け、景色もだんだんとその奇異さを表してきた。けれどもずっと、急ですべり易い溝が続いていて、階段のような足がかりになるものはなく、自分でコントロールしながら進めないのはもちろんのこと、立ち止まることもできない。下れば下る程、崖の形勢はいよいよすこいものとなり、ひとつの峡谷を窮めたと思ったら、また次の峡谷が始まっているありさまである。あたりを見回す余裕はなく、一瞬たりとも足を止めることもできない。こんな調子が十里続き、やっと峡谷を抜けて、平地に至って、本道に出た。

《9》太室山―法王寺

無極洞を通り過ぎる。西へ向かって山嶺を越え、草ぼうぼうの中を足を急がせること五里にして、法王寺に至った。寺には金蓮花があり、特産で、他所には無いものである。雨が急に降ってきた。そこで僧人の小屋で雨宿りをする。東の方に石の峯が門のように向かい合っているのが見えるが、新月の度に、その門の間から月が昇るのである。これが、嵩山八景のひとつ「嵩門待月」である。振り返るに、私が出た来た峡谷は、見えている峡谷の上にあたる。今、麓で座って眺めてみると、ただ雲気が入り込んでいるだけのように見え、我が身がそこから降りてきたことなど想像のしようもないほどだ。

◆おそらく法王寺に泊。

〔二十二日〕

《10》太室山南麓―嵩陽宮・嵩福宮・啓母石

山を下り、東に五里で、嵩陽宮の遺蹟に至る。三本の將軍柏だけが

山のように鬱蒼と茂っている。漢代に將軍として封ぜられたものである。最も大きいものは大人七抱え程の太さがあり、中くらいのものは五抱えほど、最も小さいものでも三抱えほどである。將軍柏の北に、三間の室がある、程明道程伊川両先生を祀る。柏の西には昔の建築物の柱が一本残っているが、あらかた地面に埋もれている。宋代の人の題名が書かれているが、判別できるのは、范陽の祖無擇・上谷の寇武仲及び蘇才翁ら數人のみである。柏の西南には雄壯に聳える石碑があり、四面に彫られた龍の彫り物が誠に精巧である。これは唐代のもので、裴迥が文章を撰述し、徐浩が八分体で揮毫したものである。

また東に二里行き、崇福宮の遺蹟を通る。ここはまた万壽宮とも言う。宋代に宰相が業務を行った場所である。

さらにまた東に、啓母石がある。數間の家屋程の大きさである。そばに、砥石のように平らな石がある。

また東に八里進み、中岳廟に帰り着いて昼食を取る。ここでは宋代元代の石碑を鑑賞する。

西に八里で、登封県城に入る。

《11》会善寺から少林寺へ

(県城を抜け) 西に五里進み、小道を西北に行く。

また五里で、会善寺に入る。「茶榜」の碑が寺内の西の小屋にある。元代の刻である。その後ろに、壁の下に倒れている石碑がある。唐の貞元年間の「戒壇記」である。汝州刺史の陸長源が文章を撰述し、河南の陸郢が揮毫したものである。

また西に戒壇の遺蹟がある。残る石材に彫られた彫刻は精巧を極めていたが、いずれもバラバラになって地面に遺棄されいている。

西南に五里行くと、大きな道に出た。

また十里で、郭店に至る。ここから西南に折れば、少林寺への道である。

五里で少林寺に入る。瑞光上人の宿坊に泊まる。

◆少林寺瑞光上人の宿坊に泊。

〔二十三日〕

《12》少林寺から少室山へ

雲も霧もすべて散って消えた。少林寺の正殿に入り、仏を礼賛し終えてから南寨に登ることにした。南寨は、少室山の絶頂で、高さは少室山と同じくらいであるが、尖った峯が高く抜きんでている。「九鼎蓮花」の名を冠されている。少室山の後ろを低く取り巻くのが九乳峯である。うねうねと伸びて東の太室山まで続いている。その北に少林寺がある。

少林寺はとても荘重秀麗であり、庭院には新旧の石碑が荘嚴に立ち並び、全くすばらしい。台の部分の両側に二本の松があり、高く雄大に伸びていて整っており、寸法を測ったかのようなのである。ここから少室山が目の前に横たわっている。振り仰いでも頂上を見ることができない。遊覧に来た者は、壁に向かって立っているようである。そこですぐに思った「少室山は遠景こそ勝る」と。

私は昨晚少林寺に着いたとき、すぐに少室山への道を聞いたところ、誰もが「雪が深く道も途絶えており、行くのはよくない」と言った。確かに一般には、山に登るのは晴朗の時がよい。しかし私が太室山に登ったときは、雲や霧が立ちこめていた。あるいは「山の神が遊客を拒んでいるのであり、この山の雄偉高さを知らせたくなかったのだ、ただ山の半面だけを見せた」ということなのかもしれない。しかし

しも少室山が、その優美さを映えさせることに優れていたならば、少々の雲があつたとしてもその美を損なうことはできないだろう。まして今はとても晴れており、最高のチャンスである。どうして行くのを阻めようか。そこで寺の南から山澗を渡って山に登る。

《13》少室山に登る―二祖庵・煉丹台・大峯・南寨(頂上)

六七里で、二祖庵である。山はここに至って急にすっぱりと土気がなくなり、石だらけとなる。石の崖が下に落ち込んで堅穴を成している。堅穴の middle に泉があり、その水が湧き出して岩石を突き破って飛び、流れ落ちている。ここも亦た「珠簾」と命名されている。私はただ一人で杖をつきながら進んだが、下れば下る程道がなくなり、しばらくしてようやく崖の底にたどり着いた。この岩の高さ大きさは盧巖にはかなわないが、その幽深さ険しさはこちらの方が勝っている。岩の下には青々とした深い淵があり、その四周には積雪が固まっている。

再び岩に登り、煉丹台に至る。台の三面は絶壁をなし、一面だけが青々とした崖よりかかっている。上に亭があり、小有天という。これまで探幽の客で、ここに至ったものは誰一人いない。ここから先は、石の尾根上を、振り仰いで石にかじりつき真つ直ぐに登る。左右両側は万仞もの切り立った崖で、その接合部分が尾根であるが、その幅は一寸ほどもない。手の力が尽きたら足を用い、足の力が尽きたら手を用いと、全身の力を振り絞って、ようやく登ることができた。

七里ほどで、ようやく大峯にたどり着く。大峯の地勢は平らでひろびろとしており、先ほどまで険しい岩がごつごつしていたのが、突然変わって一面が土に被われている。草や荊が茫々と生い茂る中を南に登ること五里ばかりで、ようやく南寨の頂に着く。岩を被っていた土もここでは全く無くなった。

南寨は実は少室山の北頂である。少林寺から言えば、「南の寨」となるということだ。おおよそその頂は、中頃から裂けており、南北二つの部分に横ざまに断裂している。北側の頂は広げた屏風のように、南側の頂は矛戟を並べて対峙するかのよう。両者の間は八尺から一丈ほどしかなく、そこは深い崖谷となつて、断ち切つたように険しい。両側の崖に挟まれた谷底から、一座の山峯が突起して、他の諸峯から高く抜き出ている。これがいわゆる「摘星台」である。少室山のまさに中央である。その絶頂は北側の崖とつかず離れずの形勢で、両者は断絶して渡ることはいかならない。しかし絶頂の下あたりを見下ろしてみると、糸一筋くらいで北の崖とつながっているところがあった。そこで私は衣を脱いでそこよることにし、台の絶頂に登った。すると南側の頂である九つの峯が目の前に森林のように立ちふさがり、後ろには北側の頂が屏風のように横様に広がり、東西はどこまでも深い堅穴となつていて見下ろしても谷底が見えない。そこへ神仙が乗るような強い風が吹き寄せてきたが、あたかも羽毛を借りて飛び去らんかのようなようであった。

《14》少室山を降る―龍潭溝を経て少林寺へ

南寨から東北に転じ、土に被われた山を下ると、にわかには升ほどの大きさの虎の足跡を見つけた。草ぼうぼうの中を更に五六里いくと、茅屋があった。そこで宿を借り、火をおこして持参した米を炊いてお粥を作った。三四杯すると、飢えや渴きがずっと消え去った。庵の僧侶に、龍潭へ至るの道を質問する。

一座の峯を下る。峯の背(尾根)はだんだん狭くなり、土と石とが交互に交じり、其の上を荊が伸びて被っている。そんなところを枝に手を掛けながら進んでいくと、突然一万丈もの崖が出現し、渡れそう

もない。そこで道を転じて登っていく。峯の勢いがうねうねと伸びているところを見上げながら走り下ると、先の所と同じように石の崖が削られている所に出た。行ったり来たりを数里以上も繰り返して、やつと窪地を迂回できた。更に五里で道路に出ると、そこが龍潭溝である。振り仰いで、先に道に迷つた所を眺めてみると、険しい崖や斜めに飛び出した石が万仞ほどの切り立った高い障壁の上にあった。清流が其の中から吹き出し迫り、鬱蒼と緑が茂る険しい石の壁に降り注いで、色彩豊かな美しい霞を形成している。峡谷は谷川を挟みながら曲がり、両岸に建つ僧侶や道士の庵が、蜂の巣や燕の巣のように見える。おおむね五里ほどで、深くまた緑の濃い一龍潭がある、その深さは丈の単位では測りきれない程である。更に二つの龍潭を経由して、ようやく峡谷を出る。この日も少林寺に泊まる。

◆少林寺に泊。

「二十四日」

《15》少林寺西北の名蹟―初祖庵・初祖洞・甘露台・藏經殿

少林寺から西北に行き、甘露台を通り過ぎ、さらに初祖庵を通り過ぎる。北に四里で、五乳峯に登り、初祖洞を探索する。洞は深さが二丈、広さはそれよりも少し減じる。達磨大師が九年間壁に向かつて座られたところである。洞の門は、下の方では少林寺に臨み、遠く少室山と向かい合っている。ここには泉水がない、だから今は棲む人もいない。

下つて初祖庵に戻る。庵の中に達磨影石が供えてある。石は高さ三尺もなく、表面は白の中に黒い模様があつて、莊嚴な胡僧の立像である。庵の中殿に六祖が手ずから植えられた柏がある、その大きさは

すでに大人三抱えほどもある。石碑によれば、慧能が鉢に入れて広東から持ってきたものだという。台を夾んで立つ二本の松は、少林寺に於けるそれに次ぐものである。少林寺の松はすべて真つ直ぐ高く伸びていて、中岳廟の松が倒れ傾いたり、曲がったりしているのとは異なる。ここ初祖庵の松も、直立して中岳廟のものとは異なる。

庵を下って甘露台に至る。土の丘が盛り上がり、その上に藏経殿がある。台から降りて三層の殿宇を廻る、碑刻があちこちに散在していて、見て回る時間が足りないくらいである。その後は千仏殿である、その雄壮華麗さは比すべきものがないほどである。

殿を出て、瑞光上人の房で昼食を取る。

《16》登封を出て西へ

そして出発し、馬を急がせて登封県からの大道を走る。

〔河南河南府偃師県域〕

轅轅嶺を通り過ぎ、大屯で宿泊とした。

◆大屯に泊。

〔二十五日〕

《17》龍門

〔河南洛陽府洛陽県域〕

西南に五十里行くと、山が突然途切れた。こここそ伊闕である。伊水が南から流れてきて、この下を流れるが、水深は数石の穀物を積んだ船を浮かべられるほどである。伊闕は山が連なっているが、東西に横にまたがるように、伊水の上に木を編んだ橋を架けている。この橋を渡ると、崖が更に険しく聳えている。一座の山がみんな削られて崖状になり、崖いっばいに仏像が彫られている。大きな洞は數十あり、

それぞれの高さは数十丈もある。大きな洞がある外側の崖壁は、そのまま頂上まで続いており、頂上付近にも小さな洞が彫られており、それぞれの洞に、すべて仏が彫られている。僅かな表面でも彫られていないところは無く、眺めるととても数え切れるものではない。洞がある左側に、山から流れ落ちる泉水があり、貯まって四角い池をなし、あふれた水は伊水に流れ入る。山の高さは百丈にも及ばないのに、清流はさらさらと途切れることはない。これこそこの場所が得難いものである点である。ここ伊闕の地は、人車の往來の激しいところで、湖北と河南を結ぶ大道にあたり、西北に行けば関中・陝西へと通じる。私はここから西岳への道を取って行く。

(終)

徐霞客遊記卷二上

浙遊日記

丙子の年 崇禎九（一九三六）年

【第一部】

《序、旅立ち》

〔南直隸府常州府江陰県域〕

〔九月十九日〕

私がかねてより西南への旅行を志していたが、延び延びになって二年が過ぎてしまった。老いや病いがしのびよりつつあり、このまま先延ばしにすることは難しいと考えた。黄齋齋先生が来てくれて会うのを待っていたが、先生からの音信は全くない。族兄の徐仲昭と別れの挨拶をしようと思うのだが、彼も南からここへやって来ない。そこで昨晩、土瀆莊へ赴いて彼に会った。今日出発する計画だったが、ちょうど杜若叔父が尋ねてきた。一緒に夜中まで酒を酌み交わす。酔いのままに舟に乗り出発する。同行は静聞禪師である。

◆江陰から無錫への船中泊。

《1》蘇州へ

〔南直隸府常州府無錫県域〕

〔二十日〕

空がまだ明けないうちに、無錫県域に着く。明け方くらいに、先ず人をやって王孝先に通知させ、自分は王受時に会いに行ったが、彼は

もう外出していた。そこですぐに王忠紉のところを訪ねる。王忠紉は私を引き留め、ともに酒を酌み交わして午の時に至った。そこへ王孝先がやって来て、ほどなく受時も帰って来た。私はとくに酔っていたが、更にまた王孝先と一緒に王受時のところへ行って酒を酌み交わす。王孝先は顧東署の家族への手紙を私に託す。〔自注1〕深夜まで飲み、やつと舟に入る。

◆無錫で船中泊。

〔自注1〕当時東署は、蒼悟道で長官をしていた。その手紙は、息子の顧伯昌が寄託したものである。

〔二十一日〕

再び無錫県域に入って王孝先に会い、再び少しばかり酒を酌み交わす。

〔南直隸蘇州府常熟県域〕

〔同 吳県・長州県域〕

午前船を出発させ、暮れには蘇州の虎丘を通り過ぎ、半塘に泊まる。

◆蘇州に泊。

《2》蘇州

〔二十二日〕

早朝に仲昭のために半塘で竹の椅子を買う。

昼過ぎに文文老の息子に会いに行き、あわせて閭門で買い物をする。晩に封門に含暉兄に会いに行く。顔を合わせるやいなや、彼は泣き出し、涙が顔中をおおった。私は思わず憐憫の情に駆られた。思うに、

含暉はこの蘇州の地に隠棲すること十五年になろうとしており、私と仲昭とでしばしば訪ねたものであった。故郷を離れてさすらい、更に家は破産し子どもも死んでしまったのだが、それでもなお詩文を楽しんで悲しみを慰めていた。それがここに至って以前とは異なることになっていった。孫が彼から無心をするこゝろやまず、加えて逆らい悖るといふ不孝者となつたからである。そこでまた私の小舟まで一緒に戻り、少し酒を酌み交わす。彼は私のために諸楚璵への手紙を書いてくれた。

◆蘇州呉県泊。

〔自注1〕 諸は横州の長官であつた。

〔二十三日〕

再び閩門に行き、染色を依頼していた紬と表装を依頼していた書帖を受け取る。

午前中に船を出発させる。

《3》余山へ

東に七十里進み、晩に崑山県に至る。

〔南直隸蘇州府崑山県域〕

また十里あまりで、内村に出、青洋江を南へ下る。(呉淞江への入り口に着き) 江を横切つて渡り、東岸の小さな橋の傍に泊まる。

◆青洋江と呉淞江の合流地点あたりで船中泊。

〔二十四日〕

夜明け前に出発する。

二十里進み、綠葭浜に至つたところで、やっと夜が明ける。

〔南直隸松江府青浦県域〕

正午ごろ、松江府青浦県域を過ぎる。

〔同 華亭県域〕

午後、婁県の余山の北に到着する。そこから静聞とともに上陸し、山中の塔凹の道を選んで南へ進む。最初にひとつの荒れ果てた園庭の側を通り過ぎる。ここは八年前の中秋節に歌舞をしたところである。いわゆる「施子野の別荘」である。この年、子野は美しい園庭に歌手を召し出した。陳眉公は私と一緒にここを訪ね、妖艶な宴を楽しんだのであつた。その後三年たないうちに、私は長卿と一緒にここを訪ね、再びその景勝を尋ねようとしたが、施設設備は残つていたが、住む人は風雅を解する人ではなくなつており、つまらないものになつてしまつていた。もはや持ち主が替つたかの感があつた。〔自注1〕
そして今は壊れた台と崩れた垣が残るばかり。三度訪れて、三度その姿を変えている。滄桑の変というが、全くその通りだ。塔凹を越えると、寺があるが、門がもはや無くなつていゝ。ただ大きな鐘が、木々の間に懸けられているばかりである。そして山の南側にあつた徐氏の別荘も、持ち主が替つていゝ。そこで(心配になつて) 急いで眉公の頑仙廬へと足を急がせる。眉公は客が来るのを遠くから眺めると、先ずは走つて家の中に逃げ、避けようとした。ところが、人に問うて、客が私であることが分かると、再び家から出てきて、私の手を引いて林に入る。ともに酒を飲み、深夜に至つた。私は暇を告げようとしたが、眉公は私のために雞足山の二人の僧侶〔自注2〕に手紙を書いてくれることとなり、もう少し留まるよう、強く求めた。そこで舟を出すことができなかつた。

◆余山泊。

〔自注1〕 実際兵部侍郎の王念生という者の手に渡っていた。

〔自注2〕 名は弘弁と安仁。

〔二十五日〕

早朝、眉公はもう、私のために二人の僧侶への手紙を書いてくれた。更に礼物を私に調べてくれた。また引き留めて朝ご飯を振舞ってくれた。さらに王忠紉の母親の長寿を祝う詩を二枚の紙に書いてくれ、加えて紅香米を使ってお経と仏画を描いて私に贈ってくれた。午前に、やっと出発する。思うに、これまでは東へと迂回する道のりであり、ここからが西へ向かう旅の始まりである。

《4》杭州へ

三里で、仁山を過ぎる。

さらに西北に三里で天馬山を過ぎる。

さらに西に三里で横山を過ぎる。

さらに西に二里で小崑山を過ぎる。

さらに西に三里で柳湖に入り、河を西に横切り、柳寺のそばを掠めて進む。寺は川の中州に立ち、重なりあって高く聳える台閣を誇り、まさしく五層の仏塔であり、層をなす波の光と映え合っている。これもまた水郷の景勝地であるといえよう。

西に慶安橋をくぐる。

十里で章練塘である。〔自注1〕

〔浙江嘉興府嘉善県域〕

さらに西に十里で蔣家灣である。ここは既に嘉興府嘉善県である。夜を押して行こうとしたが、群集する舟を驚かせてしまった。そこで速やかに丁家宅で泊まることとする。〔自注2〕

◆蔣家灣に泊。

〔自注1〕 ここは長洲県の南の境で、ここもまた一万戸の大商業都市である。

〔自注2〕 ここは嘉善県の北に三十五里の地にあつて、とりもなおさず尚書の改亭公の故郷である。

〔二十六日〕

二つの沼沢を過ぎ、十五里で西塘である。ここも亦た大きな鎮である。ここで夜が明けた。

西に十里で下圩蕩である。

さらに南に二つの沼沢を過ぎる。

西に五里で唐母村である、ここで初めて桑があつた。

さらに西南に十三里で、王江涇である、この市はたいそう盛んである。

ここから真つ直ぐ西に二十里ほど進み、(一旦蘇州府呉県に入って) 瀾溪に出る。

(瀾溪を) 西南に十里進むと前馬頭である。

さらに十里で師姑橋である。

さらに八里行くが、まだ太陽は沈んではない。しかしここから烏鎮まではまだ二十里はある。盗賊に遇うのを警戒し、十八里橋の北の呉店村浜に泊まることとする。〔自注1〕

◆呉店に泊。

〔自注1〕 ここは呉江県に属す。

〔二十七日〕

夜明けに出発する。

〔浙江嘉興府桐鄉縣域〕

二十里で烏鎮に至る。舟を降り、町に入って程尚甫を訪ねる。(ところが)彼はちようど虎埠に遊覧に出かけていて留守であり、二人の息子が出てきて挨拶してくれる。持参した金銭を渡し、この数年間に借りていた書籍代を返した。かくして出発した。

〔浙江湖州府歸安縣域〕

西南に十八里で、連市である。

さらに十八里で、寒山橋である。

〔浙江湖州府德清縣域〕

さらに十八里で、新市である。

さらに十五里で、曹村である。まだ晩には間があったが、泊まることとした。

◆曹村に泊。

〔二十八日〕

〔浙江杭州府仁和縣域〕

南に二十五里行くと、杭州府仁和縣の唐樓に至る。風向きが舟行に便であった。

五十里で、北新関に入る。

さらに七里で錢塘縣の櫻木場に至る。わずかに昼を過ぎたところである。私は召使いを遣って杭州城に入城させ、曹木上君のところへ行って黄石翁(道周)の行跡を尋ねさせた。しかし彼はまだ南から来ていなかった。当時木上自身も、南京に国子監として出ており、

石翁の行跡を問うすべもなかった。そこで船中で手紙を書いて、曹木上の家に投じ、返事は舟に返してもらおう手立てを取った。それはこの後、私の行く先は遙か遠くとなり、手紙を届けてもらうのも難しくなるからである。

晩に昭慶寺を訪問し、舟に戻って泊まった。

◆杭州に泊。

《5》杭州

〔二十九日〕

仲昭兄と陳木叔に手紙を書いた。静聞君は浄慈寺と吳山に遊びに行つた。この日も、舟に泊まった。

◆杭州に泊。

〔三十日〕

早朝に城内に入り、手紙を自宅へ届けてくれる人を傭い、寄託した。お昼に、一旦船に戻り、荷物のうち重たくかさばるもの(余山で陳眉公から贈られた仏画などであろうか)を選び分け、自宅へ送る手配をする。私はといえば、静聞君とともに西湖を渡り、湧金門から城内に入つて銅の炊飯俱(鍋)や飲料水を入れる竹筒などの旅の諸道具を購入した。

晩になり、朝天門から昭慶寺まで歩いて戻り、そこで入浴して泊まることとする。

この日はまた湛融師から十両の銀を借り、旅費の足しとすることができた。

◆杭州に泊。

〔十月一日〕

天氣が最高に明朗で爽快であるが、西北の風がとても厳しい。

私は静聞君と一緒に寶石山の頂に登った。山頂に巨石が積み重なっているものがある、これが落星石である。峯の西側の岩山が最も険しく聳えている。南には西湖の湖面の光を望み、北には阜亭や徳清県の諸山を眺め、東には杭州城内から立ち上るたくさんの人家の烟を見る。すべてがはつきりと明らかに見える。

山を五里ほど下り、岳飛の墓を過ぎる。

さらに（西に）十里で飛來峯に到る。市街で昼食を取り、その後峯下の洞窟群を巡る。

おおよそ飛來峯は楓木嶺から東に延びてきて、靈隱寺の前で屏風のように並び立ち、この場所ですべて石がむき出しになっている。この石には皆穴が空いており、表玉のように照り輝いている。三つの洞窟が並んでいる。それらの洞はともに混じり合っていて区別が付かなくなっており、奥深さを表していることはない。かつては楊和尚の彫刻によって破壊され、いまや乞食どもの喧噪に汚されている。しかしちやうどこの時だけは、乞食どもが静かにしていた。山間に見える石はさわやかで、猥雑な喧噪も全く聞こえない。あたかも青山がその内部をきれいに洗い、蒼天がその外側を洗い流したようであった。私は洞の下を経めぐっては、山の頂に登った。洞頂の靈妙な姿の石は天に向かつて集まるように屹立し、奇怪な格好の樹木は風に吹かれてその姿を動かしている。洞頂に座って辺りを眺めれば、かの西王母の住まいだという群玉山にも劣らない趣であった。〔自注一〕

山を下って谷川を渡ると靈隱寺である。一人の老僧がいて、法衣を

まとって台の上に黙座し、空を仰いで太陽の光を浴びながら、長い間一度も瞬かないでいる。

次いで方輪殿に入る。殿の東に新しく羅漢殿を建築しているが、五百羅漢のうち半分しかできていない。おそらく残りは西側に設ける羅漢殿に作るであろう。

ちやうどこの日は、美しいご婦人たちの集団が二三、相次いでこの寺を訪問していた。ただよってくる女性の香がまことに艶麗であった。このご婦人がたの来訪と、先にみた老僧が太陽の光を浴びながら黙座し続けている姿とは、どちらも滅多に出会えないものである。そこでしばらくこの寺でぐずぐずと過ごす。

午後、包圍から西に行つて楓樹嶺に登る。そこを下つて上天竺寺に到り、さらに中・下の二つの天竺寺に出る。再び下天竺寺の後ろに順い、西に後山に沿つて進み、「三生石」のところへ到る。この石は、ただ姿がごつごつしているだけではなく、表面が清く潤っていてすばらしい。この場所は、靈隱寺の向かいの屏風の様な山峯の南麓で、その嶺はここから東に延びて飛來峯で終わつているところであった。優れた景勝を独占するものである。

下天竺寺から五里で毛家歩に出、そこから湖を渡る。太陽は既に西の山に落ち、昭慶寺に帰り着いたときはすっかり宵闇に包まれていた。

◆杭州に泊。

〔自注一〕飛來峯はかつては靈隱寺に所属していたが、今は張某の所有となつている。

《6》臨安を経て洞山へ

〔二日〕

午前に櫻木場を出発し、(北に)五里で観音関に出る。

(ここから)西に十里進むと女兒橋である。

さらに十里進むと老人舗である。

〔浙江杭州府余杭県域〕

さらに五里で余杭県の倉前である。

さらに十里進む、余杭溪の南に泊することとする。何樸庵の家を訪ねたところ、彼は一日違いで、杭州城に出かけたところのことであった。

◆余杭県域に泊。

〔三日〕

余杭県城の南門橋で、担夫を傭う。西門から城外へ出て、苕溪の北岸沿いに(西へ)進む。

十五里で丁橋舗である。

さらに十里進む、馬橋を渡ると、余杭県と臨安県との境界である。

その北は、徑山に達する。

〔浙江杭州府臨安県域〕

さらに二里で、臨安県の青山である。市街はとても賑やかである。

溪流と山とが次第に近づき、また二つの尖った峯が向かい合って聳えている。〔自注1〕

さらに十五里で、再び山が開け、十錦亭に到る。亭の北から来て西に行く一路は、於潜県から徽州へ行く道である。亭の南を通って西に行く一路は、つまり臨安県城への道である。

亭の西から南へまた一里で、ひとつの石橋が溪流の上に跨っていた。長橋という。

橋を渡り、南にまた一里で、臨安県城の東関に入る。

そのまま西関を出ると、〔自注2〕その外は呂家巷である。その市街は臨安県城よりも却って盛んである。

さらに二里で皇潭である。その市街地は呂家巷と同じくらいである。

その西で道が南北に分かれる。北への道はこれもまた於潜県への道で、南の道が新城県へ到る道である。

(そのどちらも選択せず)ほどなく再び山なりに西南に向かって進む。

さらに八里で高坎である。ここからやつと筏を浮かべて通れる水流がある。

さらに三里で南に曲がって梟柳塢に入り、再び山間に入る。

五里で下圩橋である。橋の南から溪流を遡って西へ上がる。

二里で全張村である。村中の人の姓が張の家族である。分水県に向かう者は、新嶺を脇道とし、全張の道を回り道とする。私が聞いたところ、新嶺の道は狭く、泊まる所もない。そこで結局全張の白玉庵に泊まることとする。庵主の意という僧侶は余杭県の人であった。私が旅遊を好んでいると聞き、深夜であるにも関わらず、灯火をともし、お茶を沸かしてくれ、私に彼が日本に旅遊したときのことを語ってくれた。そのことはとても詳細であった。

◆全張に泊。

〔自注1〕ひとつは紫薇峯で、もうひとつは大山である。

〔自注2〕臨安県は城壁がとても低く、県署もぼろぼろである。

〔四日〕

〔その一〕

夜明けに食事を作り、黎明に西に出発する。

二里で橋を過ぎる。

そこを南に折れ、さらにまた六里で乾塢嶺を上っていく。この山路は甚だ平坦である。思うに、於潜県の山々は西からやってくる山脈である。東西には高峻な山嶺があるが、ただこのあたりは峡谷となって低くなっている。山の背を越えるあたりも一丈ばかりの中しかないが、南北両面には棚田が重なりあつて広がっており、水田を形成している。ここから北への流れは下圩橋に到り、青山鎮から茗溪に注ぐ。南への流れは沙岩に到り、新城県から錢塘江に注ぐ。こんな低い丘が分水嶺となつてゐると思ひもよらなかつた。この山脈は更に東に進み、ついには天に向かつて突き立つような、五尖山となる。「自注1」

五尖山の西麓沿いに進み、さらに五里で唐家橋を過ぎると、新城県の北の境域である。

〔浙江杭州府新城県域〕

《7》洞山

白い石の崖が南に壁のように立ちはだかつており、そこで川の流れに沿つて西南に進む。

五里で華龍橋である。西の塢から流れてきてここで合流する川がある。

橋を渡り、南へ小さな峠を一つ越える。

二里で沙岩に到る。前に石橋がひとつあり、川を跨いでいる。趙安橋という。ここを渡れば、新城へ向かう道である。

(しかし渡らず) 橋の北を西に、小川を遡つて進む。三九山の北麓に沿つて進み、後葉塢に入る。「三九」という名は、山の東側を趙安橋から南へ下ると朱村に至り、北側を趙安橋から西南に行けば白粉牆に至り、南側を白粉牆から東南に行けば朱村に至る。この三面の道のりが、いずれも九里だからの命名である。

後葉塢より九里で白粉牆に至る。このあたりは三九山から北へ延びた山嶺である。ただその山嶺もとても平坦である。東の流れは後葉塢から趙安橋に出、西の流れは李王橋から朱村に流れ、そこで合流する。これも「三九」という山名の由来であり、水流が山をあますところなく廻つてゐるからである。

白粉牆の西に二里で羅村橋がある。北から流れてくる川がある。枝分かれして北へ向かう道もある、これも新城県へ至る道である。

川沿いに南に一里程行くと、鉢孟橋である。西の龍門龕から流れてくる川がある。龕には四仙傳道嶺があり、鉢孟橋の西に四里の所に在る。そこが於潜県との境である。

橋の北から東に転じ、一里ほどで南に折れる。ここは東が三九山、西が洞山で、円形の山塢を形成しており、東西にはごつごつした岩山が見える。その石の黒さは漆を塗つたようで、その間に赤い楓や黄色い銀杏、さらに緑なす竹や松がまじり、彩絹のようである。その中で岩壁から浸みだした滝が、雪のように白くなり、石を洗つて落ちてゐる。現在は水流が乏しく滞留するほどのものはないが、黒い崖や白い溪谷が、あちこちに練り絹を懸けたように見える。私はすばらしい景勝であると感心した。

二里で李王橋を渡る。ついに洞山の東麓に達した。急いで荷物を呉氏の先祖を祭る祠に預ける。召使いに食事のできる店を探させたが見つかからない。すると二人の呉姓の人達が来て、ひとり食事のしたくをしてくれ、もうひとり灯火を用意して洞窟に案内しようとしてくれた。私は魚公が書いた扇をお返しにプレゼントした。洞山は、龍門龕の南からうねうねと東に伸びたもの。その石質は角が尖り、重なりあう紋がある。東南の山の半ばにふたつの洞が口を開けていて、そこ

から李王橋の下を眺めることができる。私はそのまま静聞君と一緒に西に向かって山を登った。

「自注1」五尖山に東北が、新嶺である。

【その二】

小さな溪流に沿って登る。その石は峡谷に蹲ったり、崖から飛び出してきているかのように、そこに清流が注ぎ、せせらぎの音を立てている。溪流の兩岸に踊り出でている石片はまるで田畑の畦のようで、斜めに立っているものは畦のようで、突起しているものは平らな台のようである。竹が石の中から生えていて、枝は石の上に聳えているのに、根の部分は見えない。その幹は岩の頂を覆はんばかりで、隙間も見えないほどである。

（しばらく見物した後）再び登攀を開始すると、忽然として大きな岩が溪流を塞ぐように立っている。まっすぐすつきりと独立していて、表面にある微細な石紋は風に吹かれて波打つ縮緬のようである。靈妙奇異の極みである。

（しばらく鑑賞した後）再び登れば、丈の長い竹藪の中に、新築の睥陽廟があった。雪峯をまつる石室がそこにあった。「自注1」庵の後ろは切り立った岩壁が空に向かい、屏風のように重なりあつて青々と聳えている。

その屏風の南が明洞である。楼閣の軒がそこで開いているかのようで、外には五本の脊柱が突き立っている。まさに四明山の「分窗」のようである。ただし、四明山のものは石の色がやや劣っており、この石柱が巻くようにまがっているのには及ばない。その中の一本は、上に伸びているが軒の庇には至っておらず、庇からも石が垂れている

が下の柱までは至っていない。上下にあい対していて、その隙間は二十雫以下しかない。石柱のそばに一本の樹木が有り、すつくと高く生えている。上の洞窟の庇にぶつかったところですぐに外に曲がっている。その木の緑は巖を覆い、黒い岩肌と映え合つて明らかである。

その南に、幽洞がある。この二洞は並んで口を開けており、その中間の岩肌は、桃の花のような淡い紅色をしている。洞口は高いところにあり、その入り口は閘門が空に向かって傾いているかのよう。洞内に向けて呼声を発すると、ずつと響いていてなかなか消えない。おそらくその中は空洞で、底なしに続いているのであろう。

（さらに進み）二十丈も行かないうちに、たちまち北へ南へと一転している。

北は乾いた洞がある。石段を登るが、まるで楼閣を踏み上げるかのようである。三十丈で、また南に転じ、一軒の小さな楼閣があった。奥深い静けさを感じる。

南は水を湛えた洞がある。水はひとめぐりすると、すぐに仙人の水田をなし、畦が何層にも整っている。水が水田に満ち満ちており、外に漏れ出ることもなく、かつ干上がることもない。人は畦を踏んで曲がりながら洞に入る。およそ二十丈進むと、忽然として滔々とした水音が聞こえる。小さな門をくぐって進むと、一本の小川が南から流れきて、ここに至つて谷を突き破つて流れ落ちているのが見える。ぐるぐる廻つて落ちていて、底が見えず、ただ水音を聞くのみである。

溪流に沿つて南に進み、また峡谷をひとつ越える。先には小さな門をくぐつて入ったので、（さらに進むためには）水の中を通つて行かない、流れに入つて漕いでいく。

また三十丈ほどで、溪流の中に鍾乳石が生えており、蓮華のように倒れかかり、その先端が象の鼻のように曲がっている。そこは平らな砂地と狭い門口とが次々と連続し、狭まったと思ったら広がっている。それはちょうど荆溪の白鶴洞のようだ。ただし、白鶴洞は山の麓に潜んでいるので、水を得るのも容易だろう。しかしこの洞窟は、山の頂に高く口を開けているものであり、水がたくさんあるのは本当に不思議なことである。

また進むと、洞窟はおしまいになっていた。そこには水が集まり湛えられていたが、それほど深くはなかった。また集まっている水がどこから来て、どこへ流れ落ちているのかは分からない。

洞窟を出ると、半日の間に何十年もたったような感じがした。

〔自注1〕そこはまた靈隱庵とも称されている。

〔その三〕

洞山を下り、呉氏の祠で食事を取る。

さらに南から来ている溪流を遡り、二里で太平橋に至る。この橋の西側には高姓の人が住み、東側には呉姓の人が住んでいる。彼らもまた李王橋の呉姓の人々の一派であろう。ここにもまた先祖を祭る祠があり、とても広々としている。

その頃は、まだ太陽が天空にあったが、担夫の家が近くで、帰って休みたいというし、馬嶺あたりには宿泊できるところもなさそうなので、その祠に止宿することとする。

この日は、進んだ距離はわずか三十五里であったが、遊覧した二つの洞窟は、どちらも予定外のもので（すばらしいもので）あった。誠に幸いなことであった。

晩は風が吼えるように吹き荒れて雲が垂れ込めていたが、明け方になって風はやんだ。

◆太平橋の祠に泊。

《8》桐廬を経て蘭溪へ

〔五日〕

鶏が二度目に時を告げる頃、召使いを起こし食事を作らせる。食事ができると、自宅に帰っていた担夫もやって来た。ところが、これまですずと随行していた王二という担夫は逃亡してしまっていた。

朝食ののち、あれこれ手を尽くして他の担夫を捜し求め、ずいぶん時間を費やしてからやっと出発する。

南に二里で、馬嶺を上る。一里ばかりで峠に達する。この嶺以北は新城県に属する。川の水も新城県へ流れる。馬嶺の南は於潜県である。呉城はここから西北五十里の地にある。川の水は応渚埠から分水県に流れる。

〔浙江杭州府於潜県域〕

馬嶺を下り、南に二里で内楮村塢である。

また一里で外楮村塢である。ここから南は家々は楮を生業としている。

山塢に沿って西南に七里進み、兌口橋を過ぎる。岐路が南北に分かれている。北は於潜県に達する。四十里くらいだろう。南は応渚埠に至る。十八里である。兌口橋を流れる水は、北の於潜県から流れてきて、馬嶺の水は東から流れてきて、ここで合流して南に流れる。道もこの流れに沿う。

八里で板橋を過ぎる。橋の下を流れる水は西の塢から来て、前面の

川と合流する。この川を遡って西に行けば、その道は於潜県から昌化県に達する。

また南に五里進むと保安坪である。

また一里で玉潤橋である。「自注1」ここで山がおおいに開けた。

また東に二里で、唐家拱で停留する。この地は応渚埠の北二里にある。もとよりここには市や店はない。担夫が言うには、応渚埠から桐廬に下る船は、北へまがってここを通るとのこと。そこで溪流の岸に停留したのである。しばらくすると桐廬への船に出会えた。思うに応渚埠は於潜県の南の端で、川の南はもう分水県である。於潜県の川が北の方から玉潤橋を経由して（南下し）、昌化県の川が西の麻汊埠より流れてきて、どちらも応渚埠で合流する。かくしてここで水勢が盛んになるのである。しかし玉潤橋より上流は（水量が少なく）船を浮かべるのに耐えない。一方麻汊埠より上流は、小舟でそのまま昌化県に遡れる。於潜県の川は昌化県のそれには及ばないのである。時に太陽が既に南中しているが、食材を買い求める店がない。（少し上流の）応渚埠で買い求めたいと思ったが、船は待ってくれない。そこで（食材はあきらめ昼食抜きとし）船とともに行くこととした。

船に乗り、東南に十里進むと、嚴州府の分水県である。

〔杭州嚴州府分水県域〕

県城は川の西岸にある。分水県の地は、川は東南に流れる一水があるのみである。県城の西は山は開けてはいるものの、陸路だけであり、八十里で淳安県に達する。私ははじめはこの道をたどろうと思っていたのだが、召使（担夫）の王が逃げてしまったため、陸行は不便である。そこでやむなく水行を選び、逆の方向の東南へと進む。

分水県を東南に二十里で頭鋪である。

〔浙江嚴州府桐廬県域〕

また十里で焦山である。店舗や市場が賑やかである。巳に日が暮れたが、食材を買い取ることができない。そこで水主の残りを借り、飯を炊く。

水主は流れに沿って夜も櫂をこぐ。

五十里で桐廬県城の旧県に達する。夜も半ばを過ぎていた。

◆旧県に泊。

【第二部】遊金華山日記

《9》蘭溪

〔六日〕

鶏が二度目に時を告げるころ、船を出す。明け方に富春江へ出る。

ここはもう桐廬県城のエリアである。

従僕を起こして食材を買いに行かせ、この船に載せる。

十五里で灘上に至る。穀物を運ぶ船が百艘あまりもあり、荷物を登載するのを待っている。そのため私が乗った船も停泊せざるを得ない。速やかに食事を求めて食べる。食べ終わると、別の船を求め、得られたのでそちらに乗り移って行く。時に巳に午前になっている。

また三里で、清私口を過ぎる。

また三里で、七里籠に入る。東北の風がとても航行に便がある。うたた寝をしていたら、嚴子陵釣台を通り過ぎていた。

〔浙江嚴州府建德県域〕

四十里で、建德県の烏石関である。

また十里で、建德県城の東関の宿屋に宿泊する。

◆建德県城に泊。

〔七日〕

霧がたちこめていて何も見えない。水主が食事を終えてから出発する。

午前に再び晴れる。

七十里で香頭に至り、ここで暮れてくる。〔自注1〕

月が明るく、風も便がある。

〔浙江金華府蘭溪県域〕

二十里で、金華府の蘭溪県に宿泊する。

◆蘭溪県に泊。

〔自注1〕香頭は山の北側にある大集落である。張と葉という姓のもので、高官になるものがたくさんいる。

〔八日〕

早朝に浮き橋に上陸する。橋の内外にたくさん船が鱗のように並んでいる。(西の)衢州からの朝廷の軍隊が到着しようとしており、浮き橋を封鎖して船を繋ぎ留め、通行させないようにしていたのであった。そこで荷物を顧従者にまかせて南門の旅館で保管させ、私は静聞君とともに、金華山の三洞への遊覧をしようと考えた。

思うに、金華の山々は、東西に横たわって聳え、金華府城はその南にあつて、浦江県がその北にある。山脈の西の端は蘭溪県で、東の端は義烏県である。婺水という川が東南の永康県から流れてきて、金華市の南門を経由して西北に向かい、蘭溪に至って衢江と合流している。私ははじめ、陸路で金華山へ行こうと考えていたが、婺水を遡って東へ向かっている船があるのを見た。そこでそれに乗って行くことに

した。

川は砂地の岸辺の間を流れ、周囲の山々は遠景である。赤い楓の花が粗密様々に咲き乱れ、錦のカーテンを集めたり彩霞を裁断したかのようである。それが重なる山々に映えて、まことにすばらしい風景である。その前に金華山が天に向かって聳え立ち、あたかも屏風を背負っているかのようである。そして私たちは、それらに背を向けて東南に進んだ。

(そのうちに、同舟の人に)「三洞はどこにあるのですか」と質問すると、「ここから北にあります」という答えが返ってきた。

(重ねて)「金華府城はどこにあるのですか」と問うと、「南にあります」というではないか。

そこではじめて、三洞に行くには必ずしも金華府城まで行く必要はなく、(蘭溪県から)半日も陸行すれば、(金華府城への)道の半ばで山に行けた、ということが分かった。しかしすでに船に乗ってしまったので、どうしようもない。

四十五里で小さな溪流に至った。已に日も暮れ、月が洗ったかのようには輝いている。

さらに十五里行つて陸にあがる。下馬頭の旅館に投宿しようとしたら、深夜であることから門を閉ざして入れてくれない。(ちやうどそこへ)王という姓の人〔自注1〕が、月明かりの中を家に帰ろうとしているのに行き会った。旅人(つまり徐霞客ら)が泊まる場所がないのを見て、金華府城の西門まで連れて行ってきて、一緒に旅館に泊まらせてくれた。

◆金華府城に泊。

〔自注1〕号は敬川といい、高橋埠の人であった。

「九日」

《10》金華山

金華山「その一」―鹿田寺まで

早朝に起きる。空が清らかでまるで洗ったかのようなのである。王敬川と一緒に金華府城の西門から城に入る。金華県の役所の前を通り過ぎる。そこは人々がまるで川の水のようにたくさん流れている。どうやら県の長官が無くなったばかりだからだろうか。「自注1」

さらに東に進み、蘇坊嶺に登る。この嶺はなはだ平坦で、市街地に挟まれている。東に嶺を下れば、四牌坊である。蘇坊からここまで来ると、商店がたいへん賑やかである。蘇坊嶺を南に行けば、金華府の役所である。

王敬川と一緒に歙人のやっている麵食堂に入る。麵がとてもおいしい。そこで一人で二人分を平らげた。

そして(再び)西門から城外へ出る。そのまま城壁沿いに西北へ進む。王敬川はなお残惜しげにしてしばらく同行したが、やがて別れた。

まもなく低い丘を登り降りしながら進み、十里で羅店に至る。

「三洞はどこにあるのですか」と問う。

すると「前に傾いた尖峯が西側に見えてきたら、その東側にあります」と言う。

(よく分からなかった)土地の人をつかまえて詳しく聞いてみた。

(すると)「金華山の中程が鹿田寺である。そこから山脈が東に伸びたものが南に曲がって芙蓉峯となる、これが尖峯です。金華府内の龍脈の起点となります。(鹿田寺から)西の伸びた山脈群が南に集まったものが三洞となります。三洞の西は、すぐに蘭溪との境界です」と

答える。

初めは三洞を経由して蘭溪に取って返ろうかと思ったが、ここから東にも他によい景勝があるのではないかと思ひ、芙蓉峯へと向かって進むことにする。

羅店から東北に五里で智者寺である。そこは芙蓉峯の西にあたり、金華山南麓を代表する寺院である。(しかし)今は荒れ果てている。その中で一殿の中に石碑がひとつ残っている。これは陸游が智者大師のためにこの寺を再建したことを記したものであった。その碑文は陸游の揮毫になるものであった。石碑の背には陸游と智者大師の書簡数編を刻んでいた。碑文は楷書で、書簡は行書であった。どちらも趣があるすばらしいものである。おいしいことには職人がいないため、拓本一通を得て楽しむとすることができない。

智者寺の東には芙蓉庵があり、そこから芙蓉峯に登る道がある。私は、芙蓉峯は確かに円錐形で面白いが、その高さは北山の半分にも及ばない、(だから登るまでもない)と考えた。そこでこの峯は登らないことにした。かくして智者寺から西北へ、山路を登る。峯や窪地を登り降りしていると、五里で清景庵に至った。庵僧の道修が引き留めて食事を振る舞ってくれる。その後、私を引率して北の窪地から楊家山に登る。楊家山は北山が南に伸びているその第二層である。さらに南に下れば芙蓉峯で、これが第三層である。

楊家山の西側を廻り、二つの山が挟んでいる間を通って北に向かう。「自注2」だいたい七里ほどで、北山が後ろに聳え、楊家山が前面に配置され、その中間に窪地が開ける。そこには巨石が横たわり、空に聳える。その岩を重ねて台が作られており、その上には竹が植えられ房が設けられている。朱開府の別荘であった。「自注3」

その東北は石がさらに壘壘と重なり、大きいものは獅子や象くらいもあり、小さいものでも鹿や豚くらいである。いずれも草むらの中に蹲っている。これが石浪である。あの黄初平が石を叱りつけて羊に変えた場所であるが、どういうわけか、また石に変化している。

石の上が鹿田寺である。玉女が鹿を駆使して耕地を耕したので、この名がある。耕地の前に石がある。その形が似ていることから「馴鹿石」という。

「自注1」長官は、歙県出身で項士龍という人であり、辛未の進士であった。五日間の間に、士龍本人の他、彼の父親と彼の三人の息子が相次いで痢病でなくなった。

「自注2」東が楊家山で、山の辺りに民家が数十軒ある。西が白望山で、仙人が鹿を眺めたと伝えるところである。

「自注3」朱の名は大典である。

金華山「その二」―鹿田寺から金華山の奥を極める

この寺（鹿田寺）はその来歴は古いが、後に宦官達によってだんだんと食い物にされてしまった。しかし金華府知事の張朝瑞「自注1」が、殿宇を創建し、石の羊の群れを保全した。屠赤水の手になる「遊紀」があり、殿宇の中の石碑に刻まれている。

私がそこに到着したのは、已に午後であった。聞いてみると、鬪鷄巖がその東にあるとのことだった。そこですぐさま、静聞君と一緒に、二里東に進み山橋を渡る。山橋を東に下ると、二つの峯に挟まれているところに出た。小川がその中から流れ出ている。峯の石はすべて切れ切れになっていて、空へ飛び出し、小川に向かって走っているかのようであり、その形は鷄のトサカが怒起しているのに似ている。溪流

がその下へと走り流れ落ちていて、これもまた一景勝である。

鬪鷄巖から東に数里下ると、赤松宮である。ここを下ると金華府城の東門へと連なる道である。思うに芙蓉峯の東の谷に位置するのだろうか。

鬪鷄巖の上に、趙という姓の樵夫が住んでいた。彼は北山の頂を指さして、「北山の頂に基盤石がある。石の後ろに『西玉壺』があり、石から水がそこに注いでいる。日照りの時にその水を取って雨乞いすれば、とても靈験がある」という。

時に日は已に傾いているが、静聞君とともに急いで草むらを掻き分けて登る。しばらく登ると、不意に呼びかける声が聞こえた。趙樵夫が、私たちが間違っていて西寄りになっているのを見て、東を指さして深い草むらの中を誘導しているのである。

まっすぐに約二里ばかりで、やっと石の群れのあたりに着く。石の前に平らな台がある。後ろには岩が積み重なって聳えている。その中に一間ほどの小屋があり、仙人の塑像が彫られている。これがこの山の主である。塑像の後ろの石室の下に盆ほどの水たまりがある。おそらくこれが雨乞いの水であろう。そうしてその上の方には小川があって、清らかに山頂から下っている。

時に太陽は沈もうとしていた。そこで（急いで）その流れを遡って再び進むと、門のように石が並んでいるところがあり、そこから水が注ぎ出でていた。門の上流にさらに浅く平坦な溝があった。これがそが西玉壺であろう。

聞くところによると、ここから東にさらに東玉壺があり、どちらも山の頭から水を出して谷をなしていると。西玉壺からの水は、南に下

るものは棋盤石を経て三洞に浸潤していき、北に下るものは裏水源を経て蘭溪の北に出る。東玉壺の水は、南に下るものは赤松宮を経て金華府城に出、東に下るものは義烏県に出、北に下るものは浦江県に出る。おおむねここが、金華府の分水嶺であるという。

玉壺は昔は盤泉とも呼ばれていた。その上に先が分かれて聳えているものを、今は三望尖と称している。飾って言う場合は、金星峯とするが、総称すれば北山である。やつと峯の先端に至れば、ちょうど落日が深い川に沈むところであった。峯の下を眺めやれば、一筋の水が残光を受けて光り、滔々と水を湛えて姿を一定にしていなぬものが見える。思うに衢江が西から流れてきてひとたび曲がっているところが、そこなのであろう。

夕陽は已に沈み、次いで月が輝いてくる。天地の間の全ての音は消え去り、紺碧の世界は洗ったかのようだ。まことにこの玉壺は人を骨髄から洗浄するものであり、私たち二人は、身体と影とが別物であることを覚るものであった。思うに下界の世界はこせこせしていて、誰がこのような清らかな光りの輝きを理解してようか。仮に高殿に登って長く吟じたり、うま酒を用意して大江を眺めたりしたとしても、われわれがこうして万山の絶頂を踏み、道を窮め尽くしていつて、塵埃にまみれた世俗世界から遠く離れることが、天と地との間ほどもあることは、比べものにならないのである。たとえ山の精霊や怪獣が、群れをなして近づいて来たとしても、恐るるに足りない。ましてや静寂の中、万物が動かない中で、天空・宇宙とともに遊ぶのであれば、その愉しみはまたとないものである。

しばらく彷徨し、やがて二里下り、盤石に至る。

さらに草藪の中を二里下り、鬮鷄巖に至る。趙樵夫が私たちの声を

聞きつけ、戸を開けて出てきた。そして「自分がこの山に住んでから、あなた方のような方はいませんでしたよ」と言う。

さらにまた西に一里上って山橋に至り、さらに西に二里で鹿田寺に至る。寺僧の瑞峯と従聞が、私たちが中々帰ってこないもので、二手に分かれて遠くから呼びかけてくれている。その声が、谷を震わせていた。

鹿田寺に入り、入浴して就寝する。

〔自注1〕海州の人

〔十日〕

金華山「その三」金華三洞遊へ

鶏が時を告げるころ起きて朝食を摂る。空には已に曙光がさしている。鹿田寺の僧の瑞峯が私たちのために数本の松明を用意してくれて、寺僧の従聞に担がせて同行するよう手配してくれた。

朱荘の後ろから西に一里行き、北に山路を登る。道は甚だ険峻であるが、一里ほどで、尖った岩が峯の頂で突出しているのがあった。その石の辺りから北山に沿って東に行けば、玉壺に到達できる（これは昨日の道）。（今日は）石の辺りから峯を越えて北に行く。そこが朝真洞である。

洞の入り口は高い峯の上であり、西に向かって高く曲がっている。下は深い谷に臨み、その谷の中には住居がぐるっと取り巻いている。あの秦を避けた桃源郷の人々かと疑うが、どこからやって来たのかは分からない。これを問えば、双龍洞の外に住んでいる人達だという。

金華山「その四」—金華山と三洞の概要

思うに、北山は玉壺から西に伸び、その中頃の支脈はここで一旦終わる。その後さらにまた一支脈を生み、西に進んで蘭溪まで走る。

後に生じた支脈が幾層かをなしており、第一の層が廻って龍洞場となり、第二の層が廻って講堂場となり、第三の層が廻って玲瓏巖場となる。金華府の境域はここで終わりである。

玲瓏巖の西は、また廻って紐杭となるが、ここは蘭溪県の東の境である。その第二層が廻って白杭となり、第三の層が廻って水源洞となる。ここに至って、高い崖や深い谷といったダイナミックな地形も終わりとなる。

さてその後を生じた支脈だが、層をなして中頃の支脈を取り巻いている。そこで中頃の支脈は西で止められて、どっと下へ崩れ落ちていくことになる。陥った第一層に朝真洞が口を開ける。その洞窟は高いところにあつて、洞底も乾いている。陥った第二層に冰壺洞が窪んでいる。この洞窟は縦に奥深く、滝がその中に懸かっている。陥った第三層に双龍洞が穴を開いている。この洞窟は変化に富んで幻影的で、水が水平に流れている。これがいわゆる「金華三洞」である。

三洞ともいわずれも口を西に向け、重なりあうように層をなしている。それぞれの距離は一里ばかりであるが、山の勢いが険峻なため、俯瞰して一度に目に収めることはできない。しかし洞を流れる水は、上の洞から下の洞へ、層をなして下っている。

中頃起きる支脈が尽きたところで、南へ下る支脈が生じていて白望山となる。その東の楊家山ともども、北山の前に並んでいる。鹿田の門をなしている。

金華山「その五」―朝真洞

朝真洞の門口は広く開けており、その内は次第に下に下がっている。松明を手にして深く入っていくと、左側に脇部屋のような小さな穴がある。そのままにくねくねと進む。穴の行き止まりに水がしたたり落ちているところがある。けれども岩の隙間の底部は乾いている。水がどこへ流れていつているのかは分からない。

脇室の穴を戻り、洞窟本体を底まで探求しようとする。そこは巨大な岩石が高低様々に聳えていて、上を振り上げば益々高くなり、下を見ればどんどん深くなっている。石の隙間を登ったり降ったりして、再び巨大な脇室に出た。すると忽然と、一筋の光が天から下っているところがあった。思うに、洞窟の天井はとても高い所にあり、そこに円い隙間が空いているのであろう。そこから下へ天光が差し込み、あたかも半月のようである。ほの暗い中でその光に出会うと、美しい真珠や寶石でできている灯火を見るようである。

内洞を出ると、左側にまた二つの洞がある。下の洞は、入ってみると少しで行き止まり。上の洞はくねくねしていたが、これも脇室程度である。右側に縦穴がある。覗いてみるが底が見えない。内洞の最深部なのだろうと思われる。

金華山「その六」―冰壺洞

朝真洞を出て、ついで石が突出している峯頭から南に下る。

一里ほどで、西北に曲がり、また一里ほどで冰壺洞に出る。思うに朝真洞から下ってくる第二層の山である。

冰壺洞の洞口は、空に向かってくちばしを開いたようである。先ず洞に杖を投げ入れ、ついで松明を紐でつるして下ろすが、水の流れる音を聞くばかりで底は見えない。そこで岩の隙間に手をかけ、虚空の

中を通るようにして、洞の咽喉に入っていく。すると忽ち、轟々たる水音が聞こえた。そこで松明を手に取り、そろそろと進むと、洞の中央に、一筋の滝が空から落ちているところがあった。氷の花か玉のかけらのような水しぶきが上がり、暗黒の中で銀白の輝きを見せている。その滝の水は石の中に注いでいるが、その後どこへ流れていくのかは分からない。

再び松明を手にして、四方を探索した。洞窟として縦方向に深いことは朝真洞よりも勝っているが、屈曲ぶりは及ばない。

金華山「その七」―双龍洞

冰壺洞を出て、真つ直ぐ一里ばかり下ると、双龍洞である。洞は二つの門がある。「自注1」一門は南向きで、一門は西向きである。どちらも外洞である。中は大きく広々としていて、大きな建物が高く聳え、四方に門を開いているかのようなのである。小さな部屋や脇室のような感じは全く無い。しかし内部には石の柱がぐねぐねと曲がり、鍾乳石が垂れ下がり、様々な不思議な景観をなしている。これが「双龍」の名の由来である。

内部にとても古い石碑が二つある。立っている方には「双龍洞」の三字が刻まれ、横たわっている方には「冰壺洞」の三字が刻まれている。どちらも燥筆によって飛白体で書かれているが、揮毫者の姓名を記さない。きっと、近代のものではないのであろう。

流水が洞の後ろから内門を通って西に出て、外洞を経由して流れ去る。うつむいて、水が出ているところをじっと見たところ、岩がその上を覆っていて、わずかに一尺五寸ほどの隙間しかない。まさしく洞庭山の左の裾野の丘と同じで、地面に這いつくばるようにしないと、

中に入れない。ただ洞庭山の場合は、地面が土であったが、ここ双龍洞では下が水であるのが異なっている。

瑞峯が私のために潘姥の家から浴盆を借りてくれた。「自注2」姥が茶菓でもてなしてくれる。

そこで、衣を脱いで盆の中に置き、裸で水の中に伏して入り、盆を手で押して狭い口に入る。隘路を五六丈ばかり進むと、たちまちぐんと広がっている。

一枚の平らな石板が洞の中に置かれている。地面から数尺離れており、大きさは数十丈、薄さは僅かに数寸しかない。その石板の左側からは鍾乳石が垂れ下がっている。その色はつややかで形は幻想的で、宝玉で作られた柱や旗竿のようで、洞の中に縦横に並んで立っている。その石板の下の方は、門を開き隙間を空けているように分かれていて、曲がりくねり、表面は冷たく輝いている。流れを遡って更に進むと、洞がだんだん低くなっていて、とうとう進めなくなった。この洞の側面の石の辺りに水が流れ出している小さな穴がある。その大きさは指を入れられるくらいしかなく、水はその中から流れ出している。私は口でその水を受けてみたが、甘く冷たいことが得も言われぬものであった。おおよそ内洞の広さ深さは外洞よりも勝るものであった。

まとめると、朝真洞は「一つの隙間から天光が注ぐ」のが奇勝で、冰壺洞は滝がもたらす「無数の珠玉」が特異な光景、双龍洞は外洞には二つの門があつて、内洞には重なる帳が垂れ下がるという、水陸を兼ねていて、暗さと明るさの両方において不思議な光景を現出しているものである。

「自注1」瑞峯が言う「この洞は初めは門は一つであった。南に向かつている門は、万暦年間に、水の流れが崖の石を押し倒してできたも

のである」と。

「自注2」この姥は洞口に住んでいる。

金華山「その八」―金華山の残りの名勝を経て蘭溪の上洞寺へ

双龍洞を出ると、太陽が既に中天に昇っていた。潘姥が黄梁を炊いて食事の用意をしていくれた。彼女の好意に感謝して頂いたが、御札に杭州で購入した傘を一張り進呈した。

かくして鹿田寺の瑞峯・從聞の二人に別れを告げ、西に山嶺を一つ越える。その山嶺の西側には窪地がある。北から中へ入り、そのまま東へ曲がる。双龍洞から五里の地である。

さらに山を半里上ると講堂洞である。この洞にも二つの門があり、ひとつは西北に、もうひとつは西南に向かっている。広々としていて清潔であり、その高さは双龍洞に勝るが、幽冥さにおいては双龍洞には及ばない。そこに居住したり休んだりするのにふさわしい場所である。その昔、劉孝標が弘子を揮った所である。今は観音菩薩の塑像がその中にある。思うにここは、北山の後ろの支脈で南に下がるうちの第一嶺が、その南に向かつて金華三洞をめぐり、また北に開いてこの講堂洞を形成しているのである。

山嶺の下の盆地の人々は石灰を作るのを生業としている。そこを流れる小川は涸れ果てていて一筋もなく、村人はわざわざ山を登って講堂洞まで水を汲みに行く。

(その涸れた)川底を渡り、ふたたび西に向かつて第二の山嶺を越えると、北山の後ろの支脈が南に下る、第二の層である。嶺を下ると窪地がぐぐつと迫ってくる。その窪地ではさらさらと水が流れる小川が北から流れ込んでいる。またその小川を涉って西に進み、再び山嶺に

沿って北に上ると、石橋が口をあけたようなところがあって、水が湧き出している。ここが北山後支脈の南下した第三の層である。外側は狭まっていて、内側は曲がりくねっている。ここは玲瓏巖と名づけられており、講堂洞から約六里である。

この山嶺に隣接する窪地には、民家がたくさん並んでおり、自然と一つの郷村世界を形成している。あの陶淵明が描いた桃源郷とて、ここには及ばないだろう。ここから転じて西に進み、山嶺を一つ越えれば、蘭溪県との境界である。山嶺を(南に)下れば紐杭である。ここもまた民家が数十軒ある。さらにまた山嶺を(西に)一つ越えたところを思山祠と言う。つまりそこが、北山後支脈下の第四の層である。玲瓏巖からは西に六里くらいである。

この時、太陽が沈もうとしていた。洞源寺への路を尋ねると、ある人は「十里」と言い、またある人は「五里」という。速やかに山嶺を下り、小川に沿って南に五里進むと、暮れに白坑に至った。ここも村人は多く、石灰作りを生業としていた。

さらにまた西に進み石塔嶺を越えると、そこが北山後支脈下の第五の層である。洞源寺はその山嶺の後ろの高い峯の北にある。この山嶺から脇道の小道を通って上れば僅かに一里ばかりであるが、正面から登る道は、一旦山を下りた麓の洞の傍らにある。そもそもこの地にも三洞がある。下にあるのが水源洞で「自注1」、上にあるのが上洞、「自注2」真ん中が紫雲洞である。このあたりは総称して「水源」という。だから同じ寺を「水源」と言ったり、「上洞」と言ったりする。そこで洞源寺と水源洞とは異なる場所にあるのである。

山嶺上の小道から寺に至ることができる、だから先ほど「五里」と言ったのだ。そして水源洞まで嶺を下り、そこから再び上ることもで

きる、だから別の人は「十数里」といったのだ。

時に真つ暗となり山道も分からなくなった。しかも道を尋ねられる地元の人も見あたらない。そこで大きめの道に沿って山を下る。しばらくすると西へ分かれ、下る小道があった。私は静聞を説得してその小道を進むことにした。しかししばらくしても寺に行き着かず、石灰を焼くかまどが眼前にいっぱい見えるばかりであって、小道が複雑に入り組んでいる。ちようどうろろしている内に、かすかな灯火が遙かに見えた。速やかにそこに走ったところ、粉挽き小屋であった。その住人が言うには「この地は水源という所である。この窪地から北に行つて洪橋を渡り、右の尾根道に従つて三里上れば上洞寺である」と。深夜であり、行き着くのが難しいだろうと思つて、小屋に泊めてもらおうとした。ところがその人は「月が昼のように明るく、この山の小道には分かれ道もない。行くのに支障はありません」と言う。そこで初めて、洞源寺は北山第五の層の北側にあることが分かった。そこで渓流を遡り、西北に進んで洪橋に至る。白坑からおよそ四里であった。橋を渡つて北に向かい、尾根道を踏みしめて一里ほど上り、東に曲がつて更に一里ほど進み、漸く洞源寺に行き着いた。無理を頼んで投宿する。

寺に「靈洞」について話す僧侶が宿泊していた。そこで趙相国に「六洞靈山」に関する刻石があるのを思い出した。それはこのことだろうか。しかしはつきりしないうちに寝てしまう。

◆洞源寺に泊。

〔自注1〕一名湧雪洞である。

〔自注2〕一名白雲洞である。

〔十一日〕

金華山「その九」―洞源寺の石碑の考察

黎明に起きると、(昨夜会話した)僧は既に出立していた。

私は寺の前殿を過ぎ、黄貞父の碑を読んだ。そこでいわゆる「六洞」とは、金華の「三洞」とこの山の「三洞」とをあわせて、「六」としたものだを知った。

前殿を出ると、趙相国の祠がちようどその前に当たっている。高く聳える楼閣がある。趙相国の「靈洞山房集」や「六虚堂記」で称される「靈洞山房」とはこのことであろう。私は久しくここにあこがれていたのだが、今思いがけずそれに出会うことができた。自然(偶然?)がもたらす成果は、人があれこれと作為するよりも、遙かに靈妙な働きをするものではないか。そこで朝食を待たずに、静聞とともに、寺の後ろから石畳を踏んで北に登り、先ず白雲洞を尋ねることにする〔自注1〕。

〔自注1〕洞は寺の北二里にある。

金華山「その十」―蘭溪の洞めぐり

一里で山嶺の頂に達する。そこを越えて北に進む。嶺はへこんでいて突然ぐるつとまわりながら下り、鉢型に窪みを作っている。草藪を掻き分けながら下ると、深い洞が一つあり、漆黒の闇へと落ち込んでいる。これこそあの白雲洞ではないかと思つたが、あまりに狭いため疑惑の念がぬぐえない。すると突然一人の樵夫が洞の上を通り過ぎた。仰ぎ見て彼に質問した。すると「白雲洞はさらに北にあります。これは洞の窓です」と言う。そこで再び上り、北に向かう。しかしそ

の間、水は全くない。

二つの山に挟まれる間に、ぐるっと廻って一大窪地を形成している。広さは百丈に近づき、深さも数十丈あり、螺旋状に下っている。もし水がそこに湛えられていれば、仙遊県の鯉湖と同じだ。しかるにここは水が無い。私が見てきたところで、四方を頂に囲まれていて、しかもそこに水が注ぐ裂け目が無い窪地は、ここだけである。

また下り、左への分かれ道沿って、西へ山の狭間へと転ずれば、そこが白雲洞である。

(白雲洞)は洞門が北を向き、門の頂部分に横様に裂けた石が懸かっているようにになっている。洞の中から仰ぎ見れば、ぐっと曲がった様は、天台山寒巖山にあった「鵲橋」が空に横たわっているのと同じ景色である。

洞に入り、左に曲がり、だんだんと下っていくとだんだん暗くなる。高く聳える門があり、内側はとても深い様子で、門の外には石の屏風と遙かに対峙している。(そこを通り過ぎて直進し、)暗黒の闇の中を杖で地面を探りながら数十歩行くと、洞窟内はだんだん広くなっている。しかし灯火が無く、あたりを見渡しても何も見えない。そこで歩みを返して引き返す。途中まで引き返し、先ほどスルーした高く聳える門に入る。はじめは暗黒の闇しか見えなかったが、ここに至って光線が安定すると、歴歴として色々なものが見えてくる。そこで更に門と対峙していた石屏風の所を廻って洞を出、山嶺を越えて寺に帰る。

朝食後、寺を出発し、元の道をたどって西に下る。二里で洪橋に至る。今度はこれを渡らず、橋の左側の民居の後ろを半里行き、紫雲洞に上る。

洞門は西に向いている。洞口は高いところにあり、上下とも平らで

整っている。其の間に四五本の鍾乳石の垂れ下がった柱があり、門や窓を開いたようになっていて、洞の内と外とを二つの層に区切っている。玉の窓や緑の旗竿のような石が洞内にはどこにでもある。洞は広くまた奥深く、岩石の表面も十分に美しい。

洞の北の隅にまた奥深い洞がある。曲がりくねって深いようだが、松明が無いのでやむなく引き返す。

洞から下って(洪橋へ戻り、今度は)この橋を渡り、溪流沿いに東へ進む。山の石が半分程削られていて、掘削されたような絶壁をなしている。その麓は石灰焼きのための柴が積まれ、道を縦横にふさいでいる。ここが昨夜、道を尋ねることができなかった所であろう。石の梁を渡ると、水源洞はその傍らにある。

洞門は南向きで、ちょうど小川の上を跨ぐようである。洞口には鍾乳石が乱れ下がっているが、その中の一柱は、下から上につながっていて、手に持って持ち上げたみたいである。その上には透き通るような美しい鍾乳石がおびただしい数で下がっており、さらにまた一つの小さな洞が開いている。幻想的で蜃気楼のような景観をなしている。

洞の内部は上下二層に分かれている。下層は小川の水が流れ出てくるところであるが、洞内では川は涸れていた。しかし洞を数歩でると、小川にあふれ出るばかりの水がある。思うに、洞内の水は、水碓によって洞の側面に引き出されているのであろう。

洞の上層は洞門から石畳を踏んで上る。奥に入るに従って次第に下っていく。下りきると無限の広がり場所に来たような感じがした。とても遠くで滝の音が聞こえる。しかし明かりが無いので、奥を窮めることはできない。

「その十一」―金華蘭溪の洞の評価

洞を出て、洞口の柱を持ち上げたようなところの内側に座り、古老のような奇幻な石の様を眺める。この二日間を振り返るに、金華において四つの洞を、蘭溪においても同じく四つの洞を尋ねることができた。この地では六洞をもって、靈妙さを集めたものだとしてきたわけだが、私は八洞の景勝を極め尽くしたのである。ここで洞の優劣を評価せずにはおれない。

双龍洞が第一位、水源洞が第二位、講堂洞が第三位、紫霞洞が第四位、朝真洞が第五位、冰壺洞が第六位、白雲洞が第七位、洞窗が第八位、これが金華八洞についての順位である。これに新城県の山を加えるならば、洞山がある。ここは二つの洞口が並んで開き、左は明るく右は暗い。明るい方は色鮮やかな霞を見ることができ、暗い方は水洞と陸洞とに分かれていた。洞の中には仙人の耕地に穀物が繁茂しているかのように、畦が重なり波紋が平らに広がり、宝玉のような扉が次々と続き、狭い門が分かれ立って洞穴が曲がりくねる。この洞山の洞窟の余剰部分でもってしても、洞窗の魅力の不足を補完できるものがあるほどだ。この点によって金華八洞の中に位置づけてみれば、双龍洞と水源洞の間に相当するものであり、他の第三位以下の洞の及ぶところではない。しばらくあれこれと品評をし、やがて静聞と一緒に洞源から離れた。

昨夜来、道を尋ねた水車小屋を通り過ぎ、西の山嶺に従って窪地を出る。

西南に十五里行って、蘭溪県の南門に達した。

金華山「その十二」―下山し蘭溪から船に乗る

宿屋に入る。顧従僕はまだ食事の用意をしていなかった。せき立てて用意をさせ、急いで食べて乗船を探し求めた。この時、政府軍の援軍が北に向かっているところであり、船は借りあげられていて待機をしている状態であった。しかし援軍は中々到着しない。するとそこへ北からやってくる小舟があった。すぐさまそれに乗り込むと、布を運ぶ運搬船だった。船頭は出発するつもりはなかったようだが、そこへ船を徴発しに来た人がやってきた。そこで船頭は竿を刺して出発し、五里進んで、横山頭で停泊した。

【第三部】

《11》衢州をへて常山へ

【十二日】

黎明に出発する。

二十里行くと、溪流の南岸が青草坑である。「自注1」その時既に太陽は中天に昇っていた。川の水が極端に少なくなり、船は重くて喫水が低く、中々進まなくなった。

「浙江金華府蘭溪県域」

さらに十五里で裘家堰に至る。船頭が卸船を捜し、それと一緒に停泊する。この夜、小雨が降った。東の風がとても強い。

◆裘家堰に泊。

【自注1】ここは湯溪県に属す。

【十三日】

朝が明けると、空の雲も散開した。船頭は船室一室分の布を取り出

して卸船に渡す。風がやがて次第に航行によいものになってきた。

〔浙江衢州府龍遊県域〕

（そこで出帆し）二十里で胡鎮に至る。

さらにまた二十里で龍遊県に至る。日はわずかに午後に入ったくらいであった。別の卸船を待つことになり、ここで停泊する。

◆龍遊県に泊。

〔十四日〕

朝が明けると、この船に乗船していたものたちは、船足があまりに遅いので、みんなして船賃を払い戻させ、陸に上がって行ってしまった。おかげで船の重量は軽くなり、また船内も広々となった。だから船足が遅いとは言っても不快ではないのである。早朝からの霧は既に晴れ、四周の山々が遠望される。ただし、風が次第に少しずつ逆風となってきた、帆を操るのに苦労して浅瀬に乗り上げないのが精一杯である。

四十五里進んで、安仁である。〔自注1〕

〔浙江衢州府西安県域〕

さらに十里進んで、楊村に泊まることになる。〔自注2〕

この日はトータルで五十五里進んだ。先に行っていた船に追いついて一緒に停泊する。そこで船足が遅れていたのはわれわれだけではなかったことが分かった。

川面は清らかで月は白く輝き、水と空とが一体となって一つの世界をなしている。もろもろの憂いや雑念が、さっぱりと洗い流されるのを感じた。我が身一身と村落の樹木や炊ぎの煙とが渾然と溶け合って、全体で大きな水晶の球となったかのようだ。その表面には僅かの隙間

もなく、いささかの不純物もなく、眼前の全ての景物は軽やかに飛翔するかのようであった。

〔自注1〕ここが龍遊県と西安県の境界である。

〔自注2〕ここは衢州からなお二五里の地である。

〔十五日〕

払暁に連続して二つの灘を遡る。政府軍の援軍は既に撤収しており、貨物を載せた船が湧くようにして下ってくる。しかし灘の口が狭く混み合って、上りも下りも焦ってひしめいている。先には船を得るのが難しかったのに、ここでは船が多すぎて困難に陥っている。旅行の困難さとはこのようなものだ。

（やつと抜け出し）十里行って樟樹潭を通過し、鶏鳴山に至る。風を受けやすいと軽やかに流れを遡っていく。

十五里で衢州府城に至る。正午になろうとしていた。

浮き橋をくぐり、さらに南に三里進み、西へ折れて常山溪口に入る。

風が良好で帆を高く揚げる。

さらにまた二里で花椒山を通り過ぎる。兩岸には緑なす橘の木や赤い楓の葉が次々と現れ、ゆっくり眺めて楽しむ暇がないほどである。

さらにまた十里で、北に曲がる。

また五里進むと黄埠街である。果実がなる橘の木が千本ほどもあって、どの家でも籠に果実をどっさり盛っている。橘の実を売ろうという船が、川いっばいに並んでいる。私はちよつと上陸して橘の実を買おうと思ったが、船頭は風向きがよいことを優先させ、再びさつさと帆を揚げて西に出発してしまった。

五里で日が没した。

(さらに) 月明かりに乗じて十里進み、溝溪灘のほとりで停泊となった「自注1」。

「自注1」この西は常山県の境域となる。

「十六日」

朝日が鮮やかで明るい。東風が益々強くなる。朝起きると、焦堰を通り過ぎた。山は廻り川は曲がつて、すでに常山の境内に入っている。西安県には山に橋が多く生えているが、常山県には山が多い。西安県の草木は明るくつややかで、常山県では山の樹木が黒っぽく色彩豊かでない。

流れを四十五里遡り、昼過ぎに常山県に至る。(このようにたくさん進めたのも) 風のおかげである。

ここで上陸し、常山県の東門で担夫を捜し求めて傭う。

県城を一里ばかりで通り抜けて西門から出る。

十里進むと辛家舗である。山の小道は寂しげで、一軒の農家も無い。

さらに五里で寂れた数軒の小屋があった。太陽はもう西に沈んでいる。前途に泊まる場所がないのではと考え、そのままそこに泊めてもらうことにする「自注1」。

「自注1」この地は十五里という。

(終)